
セカンドトランス

海崎 詩響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカンドトランス

【Nコード】

N0524X

【作者名】

海崎 詩響

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった篠崎 諒が神崎 薫と出会う事によって再び生まれ変わる。その際に能力を与えられる。その能力に振り回されるドタバタ学園^{ラブ}ストーリー。

第1話

プロローグ

俺の名は篠崎諒、中学3年生だ、目覚まし時計のアラームがなって、目を覚ます。

「ここはどこだ？」俺は目を覚ます、見渡しても真っ暗だった。

諒「こういう時は現実逃避だ、寝る！」

寝ようとして目を閉じていると女の子の声が聞こえた。

？「おい、起きろ。」

誰か何か言ってるな、まあ無視だ。

？「おい、起きろ！！」知らねえな、知らねえよ。

？「何か暑いなあ、服脱ごうかなあ。」

な、何だって！？

こりゃ、起きるしか…。目を開けると満面の笑みの美しい女性がいきました。何故か似合わないハンマーを持って。

？「このエロガッパ！」諒「ぐはあ！！！」

いきなり10メートルぐらいぶっ飛ばされました。いきなり何なんでしょう！？

？「全くすぐに起きないからだ」彼女は仁王立ちで言う。

完全に目を覚ました（覚ますしかない）俺は、彼女から正座で説教をうけていた。

諒「あの…、」

？「何だ、エロ魔神」

おいおい、会って僅か数十分でカップから魔神へ昇格しちゃったよ。諒「ここはいつたいてどこで貴方はいつたいて誰ですか？」

？」「ここは三途の川の間点だ。それで私はこの門番の薫だ」

第2話

諒「はあ、つまり俺は死んだと…、お休み。（薫って名前マジかよ似合わねえー（笑））」

薫「ほおー、貴様はまた殴りたいんだな（笑）あと、名前を馬鹿にするな」

バキッ！！

諒「もう殴ってるじゃん！！つか何で心の声読んでるの？」

薫「うるさい！！お前の状況分かってるのか！？」

諒「まあ、アレだよな、俺は死んでるんだよな、確かこうなったのも家に強盗が入って、犯人がナイフを振り回してナイフを姉貴に向けたから無我夢中になってたら姉貴をかばって俺が刺されて死んだんだよな」

薫「分かってたなら、何故ボケた！？」

諒「まさか厨二的展開になるとは思えず（笑）」

薫「お前、アホなのか賢いのか分からん…。まあ、改めてだがお前はお姉さんをかばって死んだ。本来なら天国に行くんだが…。」

諒「行くんだが、どうしたんだ？」

薫「現世にもう一度生まれかわれ。」

はい？今なんだった？

薫「聞こえなかったか、もう一度生まれかわれ」諒「理由が分からない！つかどうやって！？」薫「理由は気まぐれ、生まれかわるには川を泳いで下ればいい」

うわあ、まさかの気まぐれ…、いいのか門番…。

薫「時間がない！！早く行けっ！！」
ドンっ

えっ…、まさか…。

諒「マジかよー！？薫も一度来たらお前を殺す！！」
こうして諒は流されていった。

第2話（後書き）

簡単にですが、プロフィールです

篠崎 諒

身長172cm

体重60kg

A型

年齢15歳

外見

髪色は黒

髪型は武装錬金の武藤カズキ

目の色は黒

顔は上の下

性格

明るく誰とでも馴染める性格。どんなポケもツッコムツッコミ担当。時には空気を読まないポケや天然ポケを発動する。おせっかい。

追加性格

エロ魔神：一定のエロレーダーを越えるとエロ魔神化する。

薫

身長163cm

体重44kg

B型

スリーサイズ

86/50/83

髪色は青

髪型はリトルバスターズの西園美魚

??歳

性格気まぐれ。とにかく気まぐれ。気に入らなかつたら、殴る。（ただし門番の時のみ）

通常時誰にでも優しく接する。時々諒に対し冷たい言葉を言っが陰ながら諒を心配している。通称ツンデレ。可愛いものの好き。心を許したものは極端にデレる。

第3話（前書き）

最近暇でくだらないネタが思い付きます（笑）文章に自信がありませんが出来る限り毎日更新していきたいと思ってるのでよろしくお願いします。

第3話

？「おはよう朝ですよ。」

（あ、俺転生したんだな。あいつめ、今度あつたらぶつ飛ばす…。）

？「ねえ姉さん。起きてくださいよぉ…。」

（誰か呼んでるけど関係ないな、だって俺は男の子だし（笑））

？「起きてよ」

バジっ！！

諒「痛っ！何だこれデジャブ!？」

？「やっと起きたよ、おはよう姉さん」

諒「いやいや、待て俺は君の姉さんじゃないから。つゝかそれ以前に俺は男だ!!」

明「また、寝ぼけちゃって、あなたは終
諒^{ひいらぎじょうか}華で、私^{ひいらぎあかり}は終
明
であなたの唯一の妹じゃないですか!」

イマナンティッタ？

諒「ゴメン、モウイチドイッテクレ」

明「だからあなたは私の姉であなたの名を諒華、私が明です！！」

諒「はいっー！？」

（まさか肉体が思いつきり変わるなんて…。まあそれよりも、改めて確認したいな）

諒「あの、明さんとりあえずいくつか頼みがあるんだけど、まず鏡を持ってきて、それでここの住所と俺の歳を教えて」

明「何かよそよしいし変な姉さん、ちょっと待ってて」

そついうと明は部屋を出ていった。

諒「状況を確認しよう、俺は死んで、三途の川の門番に会って、薫の気まぐれで転生した。転生したのはいいが俺は何故か女になっていた」

（OK、OK、ここまで厨二的展開で大丈夫だ。だが、何故女！？）

薫「それはね、私の気まぐれ（爆）」

諒「いきなり出てくんない！ビビったじゃねえか！！！」

明「何！？どうしたの！？一体何が……、あんただれ？」

第4話（前書き）

少しだけ長めです。

だけど駄文です。

早くうまくなりたいなあ（T
|
T）

第4話

テーブルにはいきなり現れた薫、明、そして諒がいる。明が諒の隣に、そして薫がいる。無言のまま30分経過していた。

諒「（辛い！この空気辛すぎる）」

薫「私の名前は薫と言います、君のお姉さんの諒華さんに話があった来ました。ちなみに私とお姉さんの関係は友達です」

諒「待て！誰がお前のとも…（黙れ工口魔神）…、すみません、何でもないです。」

明「なあんだ、お友達だったんですかあゝ、ご迷惑おかけしました（笑）」

薫「こちらこそすみませんでした。あの少しだけ諒華さんとお話したいので外してもらってもいいですか？」

明「分かりましたゝ、ごゆっくりゝ」

諒「お前いったい何なんだよ！」

薫「いいツツコミ！んでまあ、時間がなかったから状況説明出来なかった、ごめんなさい…。」

諒「わかった、もういいからこの状況を教えてくれ。」

薫「君には本当に悪い事をした、こうするしかなかったんだ…。ごめんなさい…。」

諒「どうしたんだよいったい！？」

薫「君には1から話さないといけない、長くなるが聞いてほしい」
薫の話聞くには、本来俺は死ななくてもよかった。だが神様のミスで殺す人間を間違えて俺は軽いケガですむのが死につながってしまいました。

三途の川で薫に会ったさい、神様がそのミスをごまかしてそのまま天国に連れていかそうとしたから、その神様を許せなかった薫が俺を再び生かす為に川に落としたらしい。

薫「それで君が女の体の理由だけど、それは体が変わったら面白いから！」

諒「お前シバくぞ！」

薫「まあまあ。それで今の状況だけど君の性格はお嬢様系だと偉そうじゃない感じ。つまり優しい感じ。君は5人家族で3人姉妹の次女になつて。だけど、君は本当の家族ではなく、両親姉妹共に義理。よかったな！」

よくねえよ！

薫「んで今は3月で君は15歳で中3で今年高1になり私立の女子校に通う設定だ」

何だと！？女子高校生になるだ！？んじゃあんなことやこんなこと…（バキッ！）はい、殴られました。

薫「それで姉の名前は瑞希16歳4月で高2、んで妹が明14歳で4月中3だ。」

まあ何となく状況がわかった。

薫「それで君は気づいてなかったと思うが自分の胸を見る。」

胸？おお！かなりデカ…、（バキッドスッ）また殴られました。

薫「違う！ネックレスだ！」

言われてみて見ると十字架のネックレスをつけていた。

薫「それを外してみて。」

そう言われて外すと本来の男の状態に戻った。

諒「よっしゃ〜！元に戻った！」

薫「話を最後まで聞いて。君がネックレスをつけている理由についてなんだが、最初に私の気まぐれで体を変えたって言ったがアレは9割嘘だ。君の、諒としての体はもう死んでいた。なのに男のまま生き返したら体が死んでいるから生き返してもすぐに死んでしまう。だからそれを防ぐ為に、そのネックレスをつけると女になる魔法をかけたんだ。そうしたら君は女としては死んでない状態だからな。ちなみに外しても生活出来るがよく持って1日だ。1日過ぎると体が朽ちるから気をつけて。あと、もう1つネックレスを絶対に水に濡らすな。」

諒「何で？」

薫「水に濡らすと魔法が一時的になくなり男に戻ってしまうからだ」
ら〇ま1/2かよ！

薫「ちなみにその魔法、消えたら12時間は元には戻らないからな」
諒「めんどくさいが、まあわかった。」

薫「悪い、忘れてた。水に濡らすなより大事な事だ。諒を知ってる人に諒華が諒って事を言うな。死者が生き返るのは本来タブーでバシたら、私とお前は死ななければならぬ。私が死ぬのは構わないが諒を2度も死ぬのは嫌だからさ。だから私は言わないし君も絶対言わない事。いい？」

諒「わかった、絶対に言わない。俺が死ぬのは構わないが薫が死ぬのは嫌だからな。」

薫「な、何言ってるんだよ、意味分らないし！お前は心配しないでいいから！っていうかそういう事言われても嬉しいわけないんだからね！」うわあむっちゃ早口（笑）

薫「まあとにかく以上の事は守ってね。それで君にはチート能力をつけました。何か質問は？」

諒「とりあえず大丈夫。あとは自由に気ままに過ごすよ。んで薫、チートつけるな！」

薫「いいツツコミだね〜！！まあチートって言っても成績がトツプランク、運動神経抜群、おまけにスタイル完璧なだけだから（笑）」

諒「そのチートならよし！大歓迎！」

薫「いいのかよ！ああ…、私がツツコンだ…。」諒「まあそれは置いて薫に言いたい事がある。生き返らせてくれてありがとう。」

薫「なんでお礼を言うんだ？君は私を恨んでもいいはずなのに。」

諒「君にうらんでも仕方がないし、あとどういう結果であれ生き返らせてくれたんだ。俺の為にやってくれたんだ、本当に嬉しかっただからお礼を言いたかった。ありがとう。」

すると薫は泣きはじめた。

薫「どうして君は優しいのかなあ…。巻きこんでしまったのに…。」

諒「もう気にしてないから、大丈夫。ありがとうな。」

アレ、薫震えてる、大丈夫かなあ。

薫「ありがとう！」

いきなり抱きついて来た。うお！胸が顔に！胸が顔に！嬉しいけど
苦しい！

薫「あ、馬鹿っ」（照）！！」

またぶっ飛ばされたよ、どれだけぶっ飛ばされたいのかなあ

（T―T）

第4話（後書き）

今回は説明が長めです。うまくまとめられるようにがんばります。
あと駄文をみてくださった人の中でアドバイスがあつたらお願いします。

学園編は次かその次までには載せるつもりです。

第5話（前書き）

題名を変えました。

くだらない妄想ネタはよく思いつかびます。
温かい目で見てください。

第5話

薫「…ごめんなさい。」

諒「もういいよ、君に殴り癖があるのが分かったから。」

薫「本当にごめんなさい…。そう言えば、まだ学校について説明し
てなかったから、説明するけど、学校名は私立水代女子高等学校と
言つて、君の今のお姉さんも通っている所であそこは寮生活となつ
ていて入学してすぐのテストの結果で寮の部屋が決まるから。ちな
みに、3位までになると専用の個人部屋になるから。それ以外は誰
かと一緒の部屋だから君は3位以内に入らないと秘密バレやすくな
るから何が何でも頑張れ！」

諒「何っ！？んじやいきなり頑張らないと死亡フラグ立つ訳！？」

薫「悪いけど、そうなつちやうから。だけど今の君なら大丈夫だか
ら！そろそろ時間だから戻らないといけないからさ、何かあったら
また教えて。ごめんけどそれじゃ！」 諒「あ、おい！行つちやつ
たよ…。まあとりあえずテスト頑張らないとまずいな…。」
いきなり悩まされる諒であった。

***** 4月入学式

諒「ここが今日から通う学校かぁ、ここで諒華として生きるのかぁ

」

（そう言えば友達今0じゃん、やっていけるのかなあ……。）
？「おはよう！」

諒「あ、うんおはよう」？「あなたの名前は！？」

諒「（いきなり何なんだ！？）え〜と終 諒華です。」

春「いい名前だねっ！私は春野千春^{はるのちゅん}あだ名はあなたに任すね！」

諒「う、うん……。何か 偉く積極的だな」

春「私中学の時の皆と違う学校に来たからまだ友達いないんだ、だから友達になつてね！」

諒「う、うん……。もう友達出来ちゃったよ」

春「さつきクラス表見に行った際に同じクラスだつて知つて諒華を見つけたから声かけたんだよ〜！」

諒「何で私が諒華だつて分かったの！？」

春「だつて『諒華として生きるのかあ〜』つて言つてたからさ（笑）でも、何か変な感じ、新しい名前をもらった感じのセリフだね。」

（ギクツ！妙に鋭い！コレはマズイ……）

春「まあいいや！クラスだけど1組だよ」

諒「（いいのかよ！）そうなんだあ〜ありがと〜、ん〜と春野千春だから……。んー、ちーちゃんつて呼ぶね。」

ち「分かった！んじゃよろしくね、諒華！」諒「んじゃ入学式始まるから向かうか！」

ち「了解！」

諒「やっと終わった〜。〜。」

ち「長かったね〜。〜。でも、次が大変だよ、テストが5教科もあるからね〜。〜。」

諒「そうだった！まあやるしかないよね」

ち「そうだよね〜、んじゃテスト頑張りますか！最初は国語だった。〜諒「わかった（本当に勉強チートついてるのかなあ〜）」

〜教室〜

先生「ではテストを始めてください。」

諒（うわあ、難っ！こんなの無理！解ける訳…アレ、意識が…。）

〜テスト全科目終了〜

先生「ではテストは以上で終わりです。寮分けは明日発表されます。明後日からその寮に全員住んでもらいます。なので、荷物を明後日持ってきてください。ちなみに学年上位3名は専用の個人部屋になります。それ以外の寮は全クラスが対象となっています。別のクラスの人とも一緒になるかもしれませんが、仲良くするように。あとテストで著しく点数が低い人は補習もあるので忘れないように。では、気をつけて帰るように。」

諒「コレはまずい…。やっちゃったパターンだ…。orz」

ち「諒華テストどうだった…って、どうしたの！？orzみたいな恰好しちやって！？」

諒「意識なくしてテスト書いた記憶がない…。」

ち「あ〜。その、ドンマイ…。赤点回避してるかもしれないし、まあ明日だよ！」

諒「うん…。んじゃ帰るね…私。」

ち「んじゃバイバイ。」

〜家〜

明「姉さん、テストどうでした！？」

諒「聞くなmy sister。」明「まあ補習なつたとしても、姉さんならやりきれますよ！」

諒「そうかもね…。部屋戻るから。あとご飯いらないから、もう寝る。」

明「ね、姉さん!？」

諒「お休み…。」

バタンッ

明（姉さん、テスト出来なかったのがやっぱりキてるんだなあ…。

よし、明日は姉さんの好きな物をつくってあげよう！）

～諒華の部屋～

薫「お帰り～！テストどうだった！？ってどうした!？」

諒「あ、薫来てたのか…。意識なくして書いた記憶がない。」

薫「いきなり現れたのにツツコミなしとは重傷だな…。まあ大丈夫だつて！明日を楽しみにした方がいいって！」

諒「ソーデスネ。タノシミニシテマスヨ、ンジャオヤスミ。」

薫「寝るな!」

知らねえ～な知らねえよ。現実逃避するし

第5話（後書き）

こんな駄文を読んでくれる人がいるのか少しだけ不安になってきました。それでも、書き続けます！

プロフィール第2段をやりたいと思います。

柊 諒華（篠崎諒女時）

身長…諒と同じ

体重…47kg

髪の色…諒と同じ

髪型…ロング（時々ポニーテール）

スリーサイズ

88 / 55 / 86

性格…諒と同じ

柊 明

身長…153cm

体重…??kg

髪の色…金色

髪型…天神乱漫に出てくる千歳君の妹さんを想像してください（名前を度忘れしましたorz）

スリーサイズ

74 / 52 / 70

性格

姉思い。少しシスコン気味。お気楽で若干大雑把で細かい事を気にしない。

今回はここまでにします。春野千春のプロフィールを発表しようにも春野さんの感じがまだ想像できてないからまだ言えません。決まり次第載せます。あと、柊家の詳しい家庭内容ですが柊家は5人家

族ですが、家には諒と明の2人しかいません。両親は海外で仕事を
している為、滅多に帰れません。一番上の瑞希は寮に住んでる為、
いません。料理は諒もそこそこ作れますが明がかなりウマイ為、毎
日明が作ってます。明が早くご飯を作らないといけない為、明は帰
宅部です。諒は転生前は弓道部でした。瑞希の入ってる部はもう少
し先で発表します。

どうにかまだネタは思いくけど、いつネタがなくなるか不安です…。

第6話

諒「ふわあゝ、よく寝たあゝ…。」

薫「やっと起きたね」

諒「来てたんだ？」

薫「違う！ずっとこの部屋にいたっ！」

ナンデスト！？

諒「なら俺はお前がいるなか、寝てたのか…、ゴメン。」

薫「いいよ！気にしなくて！だって…（だって寝顔見れたし）」

諒「（何か顔赤いし、最後まで聞き取れなかったけど大丈夫だよな）」

「

薫「それより学校行かないのか？」

諒「そうだったな、んじゃ着替えるかな、んで薫は帰れ！」

薫「えゝ何でえゝ？」

諒「そりや着替えを見られたくないからだ！」

薫「私は気にしないから」

諒「俺は気にするから！お前も見られるの嫌だろ！？」

薫「諒なら別にいいけど」

諒「言い切った！？（俺はこいつにどんなフラグたてたんだ？若し

くは男として見られてない？）」

薫「じ、冗談だよ気にしないで！（照）って何へこんでるの？」

諒「男の事情だ、それより急がないとかなりマジでマズいから！」

薫「分かってるって、んじゃ学校で！」

諒「ハイハイ、サイナラ。ん、学校？まあいいや急がないと！」

***** 学校

ち「諒華」おはよう！」諒「おはよう、今日だね、結果…。」

ち「そっぴやあゝそっぴだね、まあ補習だけは回避したいね（笑）」

？「おはよう、諒。」

諒「おはようって、お前は！？」

薫「はいはいゝ！薫ちゃん華麗に参上！（ドカーン！！）」

諒「ちよっ、お前こっちにこい！」

薫「いやん！諒が引つ張るゝ！」

トイレ前

諒「何でお前が制服着て学校来てるんだよ！？あと後ろのセット準備するな！」

薫「ねえねえゝ、この服似合う？」

諒「（駄目だ、こいつ話聞いてねえ）ハイハイ、似合ってますよあゝ 棒読み」

薫「そ、そうか。よかった（照）」

諒「何故照れる？まあそれより何故ここにいる！？」

薫「それはあなたを監視する為よ、うっかり秘密を言わないようにね。ちなみに昨日からいたわよ。」

諒「マジで！？ってよく学校の生徒になれたなゝ…。」

薫「ああーそれは私の力を使って…『そんな事に使うなあ！』」薫「まあそういう事だから。あと私の本来の年齢1000歳以上だけど、ここではあなたと同じにしているから、肉体も。」諒「じゃな」とマズいだろうな、実際は1000歳以上で高1はないな。」

薫「そっぴやあゝ。あとまだ名字言ってなかったけど、神崎ね、神崎かんさき覚えさるといて。」

諒「了解。んじゃ教室戻ろうぜ。『ラジャー』」

***** 教室

ち「おかえり、まさか2人が友達だったとは知らなかったよお！」

薫「ごめんなさい、説明が遅れていました。諒華さんと家が近所だ」とつい最近知り、仲良くさせて頂いてます。」

ち「なるほどお、んじゃ友達の友達は友達だね！これからよろしくね！」

薫「はい、よろしくお願いします、千春さん！」 諒「(何で丁寧語なんだ！)」

薫「(第一印象は大事だからよ)」

ち「????まあ、そろそろ席についた方がいいかも、先生が来るし。」

諒・薫「了解」

関「みんなおはよう！今日から担任の関野 舞せきのまいです。よろしくねえ。まあ今日はLHRの後はテスト結果発表で終わりだから緊張しないでいいからね！んじゃLHR始めるから、まあ今日は自己紹介！出席番号1番から簡単にどうぞ！」

***** 関「終わったねえ。んじゃテスト結果発表されるからちゃんと放送聞いてね！ちなみに私は補習対象者しか結果を知りません！だから放送終了後に言うから！」

「ただ今より1学年のテスト結果発表を行います。名前を呼ばれたものは放送終了後に職員室へ来るように。まず、第3位 495点あ 秋月恋きつきれん。」

諒「秋月!？」

薫「いったいどうしたの？」

諒「あいつは俺が死ぬ前にいた学校のクラスメートなんだよ。まさかあいつがここに来てるとは...。」

「第2位498点神崎薫」

諒「何高い点取ってるの!？」

薫「こう見えて勉強出来るのよ！」

ち「神崎さん凄いよ！2位になるなんて！」

「では第1位500点終諒華。以上で放送を終わります。」

クラス「ええ〜！」

諒「ナンデスト〜ッ!？」

関「それじゃ、神崎さんと柊さんは職員室に行つてね！んじゃこれから補習対象者を発表するよ〜!!！」

クラス「いやっ〜!!」 ＊＊＊＊＊＊ ＊＊＊＊＊＊ ＊＊＊＊＊＊ 職員室

諒「まさか意識がなくなつてたのにテストが出来たとは…。」

薫「これが私が使ったチートだよ！」

諒「感謝するよ、ありがとう。」

薫「どういたしまして。職員室に着いたから、後は秋月さんを待とうか。」

諒「あ、ああ…。(まさかあいつと会うとは…。絶対バレないようにしないとな)」

秋「すみません、お待たせしました…。!?あなたは!？」

諒「(まさか俺の正体気づいたのか!?)」

秋「テストで500点を取った柊さんですか!？」 諒「(何だよ焦らせるなよ!) まあ、うん。」

秋「凄いです！憧れです！」

薫「コホン、そろそろ職員室入らないか？」

秋「すみません！それじゃ入りましょうか。」

＊＊＊＊＊ ＊＊＊＊＊＊ ＊＊＊＊＊＊ 教室

諒「コレがウルズ部屋の鍵と青い腕章があゝ。」 薫「私はヴェル

ザンディ部屋の鍵と赤い腕章で恋ちゃんがスクルド部屋の鍵と黄色い腕章だったよね。」

諒「かなり恥ずかしいんだが…。」

薫「だけど着けているといろいろと便利じゃん！」

腕章をつけてる物は食堂や売店などでも優先的にする事ができ、1年間授業料免除、持ち込める私物の緩和化などないといろいろある。

諒「だがなあ…。」

ち「いやあゝ、2人とも凄いや!!今度からテスト対策には頼るよ!」

薫「任せて!千春さんはテストどうだった?」

ち「ギリギリだけど回避出来たよ!!」

諒「よかったゝ!まあテストの話は止めて授業終わったし部屋を見に行かない!?!」

薫・ち「賛成!」

第6話（後書き）

プロフィール第3段

春野千春

身長160cm

体重??kg

年齢15歳

髪色茶色

髪型テイルズオブヴェスペリアのリタ

スリーサイズ

80/58/86

性格

ムードメーカー。ポジティブシンキング。家族想い

秋月恋

身長165cm

体重50kg

年齢16歳

髪色恋姫無双の呂布

髪型恋姫無双の呂布

スリーサイズ

88/52/84

腕に銀色のブレスレットをしている

性格

みんなの前では頼れるお姉さん。だが実は甘えん坊で若干のネガティブシンキング。男嫌い（諒は例外）ムツツリエロ娘。（男嫌い
とムツツリは誰にも言わず隠している）

どうにか6話まで書きましたが未だに寮まで書けてません。どうに

か頑張つて書いていきます。
文才を分けて頂きたいです（笑）

第7話（前書き）

このストーリーは今のところ、時間がゆっくりとなっているのでまだに入学してから2日目です。

第7話

「ウルズ寮」

諒「ここがウルズの部屋かあ！中々に広い！って言うか個人なのに部屋4つもあって、風呂もあって、最新型テレビや、洗濯機、キッチンとかもあって、もはや、1人暮らし出来るよ！」

ち「凄っ…。」

薫「いやあ、こりゃ、ビックリだよ…。」

諒「んじゃ次はヴェルザンディ寮だね。行ってみようか！残りの2つもすぐ近くだしね。」

「ヴェルザンディ寮」

諒「あんまり変わらないけど、部屋が3つあってウルズは部屋の感じの色が青や紺などの落ち着いた感じでここは部屋の感じの色が黄色や橙色だね。」

薫「んじゃ、スクール寮に行ってみよう！多分秋月さんに頼めば見せてもらえるよ！」諒「そうかもね…、ゴメン、私疲れたからもう帰るね、明日から寮になるから準備しないといけないからさ。」

ち「そうかあ、んじゃまた明日ね！」

薫「…。」

「スクール寮」

秋「あ、神崎さん！え」と、どうしたの！？あとあなたは？」

ち「私は春野千春って言います！薫や諒華の友達です！」

薫「ゴメンね秋月さん。ちょっと各個人寮の見学してたんだよ。んでスクール寮も確認しようと思ってね。」

秋「なるほどあ。いいですよ！そう言えば柊さんは？」

ち「諒華は今日は帰っちゃったんだよ、何でも明日の荷物の準備をしないといけないらしくて。」秋「そうですね…。残念です…。」

薫「次は諒も呼んでくるよ。」ち「そう言えば薫って諒華を諒って

呼んでますけど、何ですか!？」

薫「単純に諒が言いやすいから。」

ち「そんな単純理由!？」

秋「まあそういう理由もありですよ（笑）今度から諒さんって呼ばうかな。」

薫「いいと思うし喜ぶぞ。あ、そうだから私を薫って呼んでくれ。」

ち「んじゃ私も好きに呼んでいいよ、ちなみにちーちゃんか千春って言われてる。」

秋「分かりました!では、薫さんに千春さん、私の部屋を見せますね!」薫「へえ」部屋は2つで基本は変わらず、あと部屋の感じは赤色やピンク色って感じだね。」

秋「はい!結構気に入ってるんですよ!他の寮はどんな感じなんですか!？」

ち「基本は変わらず、ヴェルザンディは3部屋でウルズは4部屋で後はそれぞれ部屋の色が違うくらいかな。」

秋「そうなんですかあ。今度見せてくださいね!」

薫「いいですよ。」

ち「にしてもいいなあ。こんない個人寮なんて!!私はワンルームでその部屋に他の人がいる感じだけど、まあそっちの寮見ると悲しくなるよ」秋「まあまあ、遊びにいきますから!そう言えば私の事今度から恋って呼んでください!」

薫「わかった、これからよろしくね恋さん。」

ち「よろしくね恋ちゃん!」

恋「はい!」

***** ~ 諒 ~

俺は薫やちーちゃんと別れて帰っていた。

「まさか秋月がこの県にいたとはなあ...」俺が死ぬ前に中学にいた県と今の県は違う。なのに、秋月と出会ったのは本当に予想外だった。

「あいつ引越してたんだなあ…。それにしても、まだあいつ持ってたのかよ。」

中学の頃に誕生日だった秋月に渡した銀色でシンプルなブレスレット。まさか未だに持っていてしかもつけているとは思わなかった。

「だが、俺が生きている事は言えないな。今は諒華だから…。何だろ、この気持ち…。訳分からんな、よし家までダッシュで帰るか！多分今日のテスト結果に未だに驚いてるんだな！早く帰ろう！」

***** 恋

薫「ゴメンね秋月さん。ちよつと各個人寮の見学してたんだよ。んでスクルド寮も確認しようと思つてね。」

部屋の確認をしていると、神崎さんと友達さんが来ました。何でも見学したいらしくて来たらしいです。恋「そう言えば篠崎さんは？」
ち「諒華は今日は帰っちゃったんだよ、何でも明日の荷物の準備をしないといけならしくて。」 秋「そうですね…。残念です…。」

薫「次は諒も呼んでくるよ。」

恋「（諒っ！？何で諒の名前を知ってるの！？）」

ち「そう言えば薫って諒華を諒って呼んでますけど、何ですか！？」

薫「単純に諒が言いやすいから。」

ち「そんな単純理由！？」

恋「（何だ、ただそれだけの理由か。）まあそういう理由もありですよ（笑）今度から諒さんって呼ぼうかな。」

薫「いいと思うし喜ぶぞ。あ、そうだから私を薫って呼んでくれ。」

ち「んじゃ私も好きに呼んでいいよ、ちなみにちーちゃんか千春って言われてる。」

秋「分かりました！では、薫さんに千春さん、私の部屋を見せますね！」 ***** 2人が見学を終えて帰った後は、諒華さんについて考えていました。

「諒って聞いた時は焦っちゃったよ、だって諒は死んじゃったんだよね…。ねえ…。何でいなくなっちゃったの。ブレスレットのお礼言えてなかったし、私はあなたに…。」

諒の事を考えていたらいつの間にか涙が出てました。諒に会いたい。諒にお礼を言いたい。そして私の気持ちを伝えたい、私は諒が好きって事を。「まだふつきれてないなあ、早く立ちなならないと。あ！そう言えば私もまだ明日の準備してない！早く帰らないと！」

***** 柊家

諒「ただいまあ」

明「お帰り、姉さん！テストは、どうだった？」

諒「それが、まさかのテスト全部満点だった。」 明「…。」

諒「おい、明！どうした！戻ってこい、明！」 15分後

明「それで、姉さんは満点取って学年1位になって青い腕章をもらったって事ですよね。」 諒「そういう事。」

明「姉さん凄いです！瑞希姉様と同じ1位ですね！！！」

諒「瑞希姉様？」

明「あれ、聞いてないですか？姉様は4月のテストで1位をとり、1年と2年では1位しか取ってないんですよ！！！」

諒「（チート能力がなくても天才はいるんだな…。）凄いね…。」

明「姉さんも姉様みたいにがんばって！！！」

諒「努力はするよ…。」 明「とりあえず、ご飯にしましょう！今日は姉さんの好物ばかり作りましたよ！」

諒「わかった、早くご飯にしよう！！！」

風呂

諒「いやあ、明のご飯うまかったなあ！！！！にしても何か肩がこつてるなあ、もしかして女状態だと胸があるからその影響かなあ。」

明「…さん…、話…すよ…。」

諒「参ったなあまだ、女の体に慣れてないなあ…。」

明「姉さん、電話ですよ！！！！」

諒「ん、何か聞こえる。」

明「姉さん！！電話！！！！ドア開けますよ！？」諒「マズイ！バレる！急がないと！！！！」

ガチャ

明「姉さん！！電話！！！！って姉さん！！何素っ裸なんですか！！！！」

諒「（あぶねえ！！！！）いやあ、今から出ようと思って（笑）」

明「早く服着てください！！あと携帯置いときますから！！」

諒「ありがとね。」

明「いえいえ。じゃ、私は戻るから。」

諒「さうで、誰からって、誰だこの番号？まあかけてみるか。」

プルルルルル

諒「もしもし終です。」薫「薫です、やっぱり秋月さんの事気にしてた？」

諒「ああ。危うくバレそうになったからな。出来る限り関わらないようにしたいと思ってる。」

薫「それが…、秋月さんが寮を見せてくれたって。」

諒「何で断らないんだよ！？」

薫「だって恋さんのあの顔見たら何も言えな…、ゴメン、何でもない。まあいいじゃん。部屋ぐらい見せてあげても。友達になるぐらいなら大丈夫だし、私もフォロースするからね！！」

諒「わかったよ…。用件はこれだけ？」

薫「あと、ちゃんとブラジャーをつけて女もののパンツはきなさいよ。」諒「お前、透視してるのか！？」

薫「適当に言ったのにまさか合ってるとは…。まあちゃんと女らしくしなさい。」

諒「わかった…、努力するよ…。」

薫「そういう事だからんじゃね。」

諒「薫って一体…。まあ早く服着て寝るか。」

今日はいろいろとあつて疲れたよ。早く寝よう。

第7話（後書き）

恋について詳しい事情を話すと中学時代から諒が好きでした。ただ
ど諒が死んでしまった事で一時期自暴自棄になってしまい、それを
見た両親が引っ越しをしようと言つことになり引っ越しして今の学
校にいます。

本文をちよいとまた変えました。まあ分かりにくいと思いますが暖
かい目で見てください。

第8話

（翌日）

？「おい、起きろ！」

諒「（誰だこんな朝早くに…。つかデジャウ？）」

薫「諒、何してるんだ！早く準備」

諒「薫！？待て！？今何時だと思ってるんだ！？ほらまだ朝の5時じゃないか！？」

諒は壁にかけてる時計を指差す。時計は5時になっていた。

薫「私の携帯を見て時間を確認してみて。」

諒は薫の携帯画面を確認し愕然とする

諒「8時15分！？何で！？まさか電池切れかよ…。」

薫「さつき確認したけどそうだった、ついでに言えば携帯も充電切れ。」

諒「不幸だ…。だから起きれなかったのか。そう言えば何か夢で明が起こしにきてくれた気がする…。あれはガチだったのかよ…。」

薫「そんな事より早く着替えて！！ご飯も持ってきたから！」

（7分後）

諒「準備完了！！だけでもう遅刻だ、どうしよう！！」

薫「チツチツチ！何の為に私がいると思ってるんだ、私の力でどうにかしよう！」

諒「マジで！？具体的にどうするんだ！？」

薫「こうする（ニコッ）」

薫は素早く諒の首に手刀を当て気絶させる。

***** 学校

諒「はっ！遅刻だよ！」

関「柊さん、LHRとは言えども私の話が終わるまでは静かにしてほしいんだけどな…。」

クラス「ハハハ（笑）」

諒「すみません…（照）」関「さて明日はクラスの親睦を深める為に毎年恒例の遠足があります。『ハイ！』春野さん何ですか？」

ち「バナナはおやつに入りますか！？」

諒「（なんつーベタな質問！？）」

関「バナナはおやつです！」

諒「（普通に答えちゃたよ！）」

関「場所は桜川公園です、今は桜が満開で綺麗よ。ちなみに、お弁当は一応は支給するけど足りない人は作ってもいいから。材料は食堂の人に言えばつかわせてもらうから。それじゃ時間余ってるけどLHRは終わり。チャイムが鳴るまで雑談オツケーだから、んじや〜ね。」

関野先生は用件を言い終えると他に仕事があるのか出ていった。するとクラスの約半分の女子が諒華の周りに集まってきた。

女子1「ねえ柊さん明日のお弁当一緒に食べましょ！」

女子2「ああー！私が先に誘うはずだったのに！柊さん私と食べよう！」諒「（何！？いきなり囲まれて一緒にお弁当食べようと誘われてる！？俺に何があった！？）え〜と…、『あ…。』ん？」

諒華が声のした方向を向くと話しかけようとした薫がいた。

諒「ゴメン、ちよつと抜けさせてもらうね。」

諒華は席を立ち薫に近づく。

諒「薫どうしたの？」

薫「いやあ…、その…、何でもない。それより明日の遠足楽しみだね。」

諒「そうだな。あのさ、明日の遠足で一緒にみんなと一緒に弁当食べないか？」

薫「！？いいの…？」

諒「全然構わないよ。むしろ嬉しいし。」

薫「ありがとう（照）。そう言えば明日は傘がいるかもしれないから持っていた方がいいよ、途中雨降るかもだから。」

諒「マジか！分かった、サンキュー！んじゃ他のみんなに伝えてくるからまたな！」

諒は自分の席に戻りみんなに弁当の事や雨の事を伝えた。

***** 薫

先生が去りお弁当と一緒に食べようと誘おうとしたらクラスの約半分が諒に誘いをかけていた。

「（ただ誘ってるだけなのに何だろうこの気持ち…。何かモヤモヤする…。）」

モヤモヤしていたら私に気付いた諒がこっちに来た。

諒「薫どうしたの？」

薫「いやあ…、その…、何でもない。それより明日の遠足楽しみだね。」

諒「そうだな。あのさ、明日の遠足で一緒にみんなと一緒に弁当食べないか？」

薫「！？いいの…？（まさか諒から誘われるなんて！？）」

諒「全然構わないよ。むしろ嬉しいし。」

薫「（嬉しい！？何言ってるんだよ！？だけど何か嬉しいかも…。）ありがとう（照）。そう言えば明日は傘がいるかもしれないから持っていた方がいいよ、途中雨降るかもだから。」

諒「マジか！分かった、サンキュー！んじゃ他のみんなに伝えてくるからまたな！」

薫「あ…、行っちゃった…。」

明日は遠足かぁ～楽しみ～。弁当作ってみようかな～。

第8話（後書き）

更新が1ヶ月以上遅くなってしまいすみません。就職活動などに時間がかかりすぎました。

これから日数は何日空くか分かりませんがちゃんと更新し無事完成させたいと思います。

第9話（前書き）

ただ今9話ですけど未だに一週間も過ぎてません。とても小説内の時間はスローペースです。

第9話

〔桜川公園〕

学校からバスで約1時間した所に諒華達はいた。目の前には満開の桜がいたるところにあった。

諒「ここが桜川公園！綺麗っ！」

ち「凄いねえっ！テンションアガッてキタッ！」

薫「こんなの初めて見た…。ここの世界にはこんなに綺麗な物があるんだ…。」

関「みんなあー、今は10時だから5時間後にバスに集合ね、それまでは自由に散策していいからね。ちゃんとお弁当は持つてまわること！小学生じゃないんだから馬鹿な事をしないようにね。」

クラス「ハイ！」

関「よし！んじゃ解散！」

諒「じゃ、みんなあの大きな桜のそばで食べよう！」

薫「あのさ諒、もしよかったら私の作った弁当食べてもらえないかな？」 諒「本当！？食べる！」

ち「私も食べていいかな！？」

クラス「私も食べたい！」

薫「いいよ！」

***** 諒「いやあー、美味しかった！」

ち「ホント、ホント！いい奥様になれるよ！」

薫「ブッ！奥様！？」

諒「思った。いい奥さんになれると思う。」

薫「……………（照）」

ち「さーで、今約15人ぐらいいるから缶けりしよう！」

諒「いきなりすぎるよ！」

ち「いいじゃん、いいじゃん！缶けりやる人手エあげて！」

諒「皆挙げてるし！分かった、私も参加するよ。」

ち「よし！んじやとりあえず、まず最初にみんなの電話番号を交換しよう！」

女子1「何で最初に電話交換？」

ち「その方が連絡取り合えて楽しいからだよ！本当はトランシーバーがいいんだけどないから代わりに電話で代用って訳！だから電話番号交換タ〜イム！」

〜10分後〜

ち「登録したね！それじゃ鬼は気分で私と諒華と薫と優奈ね！拒否権はありません！」

諒「拒否権なしだよ！」ち「最後にルールの確認だけど缶は4つあって鬼以外の皆はどこかに隠れて鬼に見つかつたら缶を蹴りに走る。鬼は見つけたらその人の名前を言い缶を踏む。先に缶を踏まれたらその人はアウトでゲームオーバーだけど、缶を先に蹴れたらセーフ+アウトになった人全員を解放することが出来るから。これはオ리지ナルルールだけどみんなが自ら缶を蹴りにきていいから。缶を蹴り倒すことが出来たら鬼一体消滅出来てそして鬼から鍵を1つ譲ってもらえるから。ここまでで何か質問ある？」

女子1「その鍵って何？」

ち「ただ勝利条件が逃げ回るだけってのはつまらないから、ちょっとオ리지ナル加えたんだよ。鬼以外の勝利条件は鍵を4つ集めてそれを1つの状態に戻して宝箱を開けたら勝利って事だよ。」

そう言うところから箱と4つの鍵を出した。

諒「どっから準備した！？」ち「乙女のヒ・ミ・ツ！」

諒「まあ…いいや…」

ち「あと鍵を持つてる状態で捕まったら鍵を返してもらってから、そして缶と鬼を復活させてもらうから。ここまで質問は？」

クラス「ないよ！」

ち「んじや、200秒後に探しに行くから適当に散らばってね。私

「たちも缶の配置場所変えるからね。」

クラス「了解！」

こうして、1組缶けり大会が始まった。だが薫以外は知らない、諒華には勉強以外にも運動に関してチート能力を発揮していることを。

第9話（後書き）

文章短くてすみません。もう少し長い文章書けるよう頑張ります。いい感想は頂きたいですけど批判などは止めてください。お願いします。

第10話缶けり大会（前編）（前書き）

今回は新キャラをたくさん出しました。そして、説明文より会話が
多いです。文章短くても読み疲れるかも知れませんがそれでもいい
と思ったら読んでください！

第10話缶けり大会（前編）

薫「それじゃあ、缶の配置だけどうしようか？」

ち「そうだねえ、この公園はけっこう広いし皆バラバラに置いた方がいいね。缶からは近すぎず、遠すぎずの距離で離れよう。場所には桜の近く薫は池の近く、優奈は遊具の近く、諒華は銅像の前に置く。それでいいよね？」

優「う、うん…。」

諒「あのさ、私に提案があるんだけどいいかな…。」

***** 200秒後

～チームA～

可奈「さあ、てやりますかな！」

歩「誰から攻める？一応200秒たってから缶の配置場所を知らせる電話があつたけど、いろいろな場所に散らばってるね…。」

恵美「とりあえず、姫野優奈さんが守ってる所が無難じゃない？あの子は何か運動出来る感じじゃないし。」

可「誰か見つかったても3人で行けば必ず勝てる！」

歩「私達はそうやって攻めていこう！」

***** ～チームB～

茜「私は走ると疲れるから走りたくありませんの！だから杏理さん

！美玲さん！あなたたちで倒してなさいませ！勝利は叶丸茜かのつまるあかねのもの

ですわ！オッホホホホホ！」

杏&美「かしこまりました、茜御嬢様。」

***** ～チームC～

蓮「勝負と言うからには絶対勝つわよ！星華！蘭華！愛華！」

星「もちろんだよ蓮華姉様！」

蘭「私達4姉妹が揃えば無敵だよね蓮姉！星姉！」

愛「ですけど油断は禁物ですよ御姉様方。」

蓮「そうだね。だからとりあえず、作戦としては最初は待機。相手の体力がなくなったところを一気に攻め込む作戦でいこう。」

愛「分かりました。その作戦にしましょう。私たち華の4姉妹の力を見せてあげましょう。」

*****チームA

可「缶発見！しかも誰もいない！ラッキー！」

歩「飛ばしすぎだよ…、私疲れた…。」

恵「私も…。」

可「しょうがないなあ、それじゃあ私が蹴ってくるね。」

歩&恵「いつてらっしやい。」

歩「案外楽勝だね！このまま残りも…、『それはどうでしょう？』

え…。」

恵「な、なんでここに…。」

*****チームB

茜「あら、メールですわ。何ですって！？」

杏「どうなさいました？」

茜「歩さんと恵美さんがゲームオーバーになりましたわ…。」

美「え！？始まってまだそんなに経ってないですよ！一体誰が…。」

茜「まあそんなのどうでもいいですわ。とにかく捕まらないように杏理さんも美玲さんも気をつけなさい。」

*****チームC

蓮「これは一筋縄ではいきそうにないわね。」

星「その二人はたまたまだよ、たまたま！」

蘭「だけど残りは9人だよ、このペースだとあつというまに…。」

愛「落ち着いてください。多分私の予想が正しければ相手の罠に引っかかったんだと思います。まだ予想なので誰がたてたのかは言い

ませんがこれからは特に気をつけていかないといけません。」
蓮「愛花の言うとおりにね。もう少し相手の動きを見てから私たちも動きましよう。」

***** 可「これだね、缶は。あれ中に何か入ってる。鍵だ、これが勝利条件の1ピースか。とりあえず、まず缶を。」

カコン！

可「よし！あれメール来てる。え…、二人が見つかってゲームオーバー！？一体何があつたのお…！？」

***** チームB

杏「こちら、杏理。目標を確認。桜の前には春野千春が一名。」

茜「やりましたわ！では杏理さんやつておしまい！」

杏「御意。」

そう言う杏理は電話を切り携帯をポケットに入れる。そしてスライトをめくり太ももから閃光手榴弾を取り出し千春の前に転がす。すると周りが光につつまれる。

ち「目があ！目があ！何かピカピカつてなった！」

千春は光を受けたダメージで地面に転がり回っていた。

杏「（悪く思わないでください。これも御嬢様の勝利のため。）」

杏理は缶まで残り3メートルをきっていた。すると杏理の前に四角い何かが転がってきた。

杏「これは閃光…、ピカッ！」

杏理は瞬時に体の向きを変え光をかわす。光がやみ向きをなおすと缶の前に千春ではない少女が立っていた。？「この缶を倒したかったら私を倒してからにしてね。」

杏「目的変更。目的鬼の殲滅。ターゲット…、」

***** チームC

蓮「さつき私に美玲からメールが来て杏理が缶を見つけたらしいわ。」

星「案外楽勝だね！これで残り2つだね！」

愛「早とちりはいけません、星華姉様。蓮華姉様、そのメールには缶を倒した。と言う文章がありますか？」

蓮「確認してみてもたけどなかったわ。あくまで発見した、としかないわ。」

蘭「アホだなあ、星姉。」

星「何だと！何がアホで貧乳の星姉だとお！」

蘭「そこまで言ってない！」

蓮「やめなさい、二人とも！」

そう言われた二人は静かに黙った。

蓮「今から蘭華に任務を与えます。今から杏理の所へ行き状況がわかり次第報告をしなさい。」

蘭「分かった！やつと動けるうゝ、嬉しい！」

そう言うのと蘭華は走っていった。

蓮「そして星華と愛華。今からあなたたちは協力して薫の缶を倒しに行きなさい。」

星「やったあ！」

愛「分かりました。蓮華姉様はどうされるのですか？」

蓮「私は1人で諒華の缶を蹴りに行くわ。」

星「それは駄目！柊さん頭いいし、何か罠があるかも！」

蓮「あるかもしれないから行くのよ。その方が面白いから。」

愛「分かりました、では蓮華姉様気をつけて。」 星「それが蓮華

姉様らしいって言うかなんていうか…、まあ気をつけて！」

そう言うのと3人はバラバラに散っていった。

第10話缶けり大会（前編）（後書き）

遅くなりましたがプロフィール第4段です。書ききれなかった人は次の後書きで発表します。

関野舞

身長159センチ

体重??キログラム

スリーサイズ

89/58/92

年齢25歳（独身）

髪色茶色

髪型さわ子先生

眼鏡をかけている

性格けいおん！のさわ子先生みたいな感じ。と言うより、さわ子先生。

姫野優奈

身長153センチ

体重39キログラム

スリーサイズ

79/50/84

年齢15歳

髪色紺色

性格

無口で人見知り。高校に入ってから直そうと努力中。

可奈／歩／恵美

明るくて仲良し馬鹿三人組。幼稚園の時からずっと一緒。三人がクラスバラバラになったことは一度もない。

叶丸茜

身長166センチ

体重48キログラム

スリーサイズ

93 / 60 / 92 /

髪色金色

髪型恋姫無双袁紹

性格

袁紹そのもの

私のスリーサイズ教えているのですから光栄に思いなさい！オッホッホッホッホッホッホッ！

ひはくあんり
拙魄杏理

身長168センチ

体重??キログラム

スリーサイズ

?? / ?? / ??

髪色ワインカラー

性格

不思議系。普段は無口。その他

茜のメイド兼ボディーガード。いろいろな事が出来る。（のちのちに出てきます）

ぎみづみれい
玉鉤美玲

身長166センチ

体重46キログラム

スリーサイズ

83 / 50 / 83

性格

御嬢様を抜いた袁紹。 結局お馬鹿さん。

その他

杏理と同じくメイド兼ボディーガード。 だけどドジばかりしている。 そのミスを自然と杏理が解決するため、美玲が怒られることはない。

第11話缶けり大会（後編）（前書き）

時間がかかってしまいすみません。そのかわり今回は少し長めです。
誤字脱字もあるかもしれませんが気軽に読んでください。

第11話缶けり大会（後編）

二人が捕まってから可奈は一人で座り込んで悩んでいた。

可「どうしよう…、1人になっちゃった…。」

？「か…なさん！」

可「あ、美玲ちゃん！どうしたの！？」

美「いやあ…、缶を探してるんだけどなかなか見つからなくてさあ…。」

可「だいたい場所は分かっているけど正確な場所は分からないからねえ…。」

美「そうだ！それじゃあ一緒に探そう！」

可「そうだね！！その方が見つかりやすいもんね！」

美「ここからなら薫さんの所が近いからそこに向かおう。」

可「了解！」

***** その頃、蘭華は杏理を探しにきていた。

蘭「あれえ…、桜の近くにいたって聞いたのにいないなあ…。」

周りをキョロキョロしていると先ほど皆と一緒に弁当を食べた場所に缶があることに気づいた。

蘭「ラッキー！これって棚からぼた餅！？」

缶を見つけると走り出す蘭華、その時。

ち「やっと目がなれてきたよ…。酷いめにあつた…。あ！蘭華発見！」

運悪く視力が復活した千春に見つかってしまった、缶を踏まれた。

蘭「嘘…！まさかここでおしまい！？そんなあ…。」

***** 蘭華が捕まったその頃、杏理はというと。

杏「はあー！」

？「はっ！」

未だに戦っていた。

？「ねえ私達何か忘れてない？」

杏「別に忘れてもいい事だったと思う。だから私達の戦いをしよう。」

？「それもそうね。それじゃ私の奥義見せてあげるわ！」

杏「私も。」

？&杏「くらえ！鳳○天駆！（ほう○てんく）」

ガキーン！

？「やるわね！」

杏「こんなに強い人と戦ったのは初めてです。」　？「だけど勝つのは私だ！」

杏「負けませんよ、薫。」

二人には缶けりはもうどうでもよくなっていた。

*****　蓮「銅像までまだまだ距離あるわねえ…。」

「薫と杏理が戦っていたところ、蓮華は諒華がいる銅像の所へ向かっていた。銅像があるところはちよつとした山の上の所にあるため行くのに苦労していた。」

蓮「よりにもよって、何でこんな所にあるのよ。しかも分かれ道になってるし。」

山を登っている最中分かれ道を見つけた蓮華は悩んでいた。

蓮「どっちの方が早く着けるかなあ？」

左の方は獣道になってるが近道できそうな道、右は安全だけど遠回り確定の道になっていた。

蓮「よし、左からいつて早く缶倒そう！」

そう言つと蓮華は左の道を歩き始めた。

*****　諒華

諒「あのさ、私に提案があるんだけどいいかな…。」
ち「え？何々！？」

諒「1人1人バラバラにするよりかは、固まった方がいいと思うんだ。私の予想だけど多分最初に姫野さんか、ちーちゃんが狙われそうなんだ。理由としては、姫野さん中学の時は、運動系の部活には入ってなかったよね？」

優「うん。何で分かったの？」

諒「運動系に入ってたかどうかどうしても何らかのクセが出たり、傷やマメができたりするからね。姫野さんの手は白くて綺麗な手をしているから多分文化系だと思ったの。」

優「……………（照）」

ち「なるほど。それで私の理由は？」

諒「ちよつとした罨にひっかかりそうな顔にみえたから（笑）」

ち「ひど〜い！だけどあんまり否定できない。騙されやすい人だからなあ」（笑）」

諒「と言うわけだから薫には二人をサポートしてもらいたいんだ。」

いいかな？」

薫「任せて。だけど諒は何するの？」

諒「私は指揮官として上から指示出すよ。多分銅像の所には最後に向かってくるからさ。」

薫「わかった、その前にちよつといいかな？」

薫は諒華を二人から遠ざける。

諒「どうしたんだ、一体？」

薫「以前ペンダントを外すと元の姿に戻るのは覚えているよね？」

諒「ああ。戻るのにはよく持って1日でそれ以上は体が朽ちるんだったよな。」

薫「その通り。それでなんだけど、今日は3時間の間男に戻ってもらいたい。」

諒「え、どうして？」

薫「君の今の体は確かに女だ。だけど本来君は篠崎諒だ。そして篠崎諒は死んだ事になっていて本来の諒の体は死んでいるのを無理矢理このような形にして転生させているんだ、どうしても体に負荷が

かかってしまっただよ。だから1ヶ月に1回、わざと篠崎諒に戻らないといけないんだ。」

諒「そうか、じゃあ何で今なんだ？別に夜でもよくないか？」

薫「本来は夜がいいんだが、体のケアに必要な物が太陽の光なんだ。だから昼間にしかできないんだ。」

諒「なるほど。とにかく俺は1人になったら3時間は篠崎諒に戻らないといけないわけね。」

薫「そう言うこと。それじゃみんなの所に戻ろう。」

***** 諒「入学して間もないけどいろんな事があつたなあ。」

諒は銅像の近くのベンチに座り過去を思い出していた。

諒「神様のミスとは言え死んだのに生き返るのがあり得なかったなあ、ましてや女の体になるとはマジで思わなかった。」（中学の時のメンバー何してるかなあ。皆と一緒に学校行きたかったなあ。そして父さんや母さん、姉さんは元気かなあ。）

過去を思い出し、しみりとしていた時。いきなり地震が発生した。諒「地震か！？けどあまり強くなかったな。」座っていたこともあり、大して被害は受けることはなかった。

地震が終わった数秒後

？「キャー！」

聞き覚えのある女性の悲鳴が聞こえてきた。

*****蓮華

蓮「ここは足場が悪いなあ、だけどこっちの方が近いからなあ。」

蓮華は今山道を歩いてる最中だった。その道は最初はそれなりに広がったが進むにつれて細くなり今いるところはギリギリ人が通れるぐらいの道の広さしかなかった。

蓮「だけど、こっちが近道だし、しょうがないか。」

諦めた蓮華は再び歩き始める。その時だった、突如地震が発生した。蓮「な、何！？地震！？」

足場が狭い場所にいる蓮華は落ちないように踏ん張る。だが、地震の影響で足場が崩れてしまった。

蓮「きゃー！」足場が崩れた蓮華は斜面から滑り落ちる。幸いにも10メートル落ちた所で木にぶつかり、途中で止まる事が出来た。

蓮「いたたたたっ、酷い目にあったわ…。それにしてもけっこう滑り落ちたわね、早く戻らないと…。」

そう思い立ち上がるうとするが右足に痛みを感じた。

蓮「痛っ！もしかしてひねった！？どうしよう、これじゃ登れない…、そうだ、携帯で助けを！」

助けを呼ぼうと思いポケットに手を入れるが携帯は入ってなかった。蓮「もしかして滑り落ちたときに、無くしたのかしら！これじゃ助けも呼べない…。」

絶体絶命だと思った蓮華は大声で助けを呼んだ。

だが、誰も気づかなかった。しかも、不運な事に雨が降り始めた。雨はやむことがないまま時間が過ぎていった。

蓮「さ、寒い…。こんなところにずっといるわけにはいかないわ…。こうなったら手だけの力で登るしかないわ。」

蓮華は手の力だけで10メートルの坂を登ろうとするが上手くいかずさっきの位置に戻ってしまった。何度も登ろうとするがやっぱり落ちてしまう。いつしか蓮華は泣いていた。

蓮「誰か助けてよ…。」

誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。聞こえるわけがないと分かっていたのに。だがその声に後ろから返事をする人がいた。

？「遅くなつてゴメン。今助けるから！」

蓮「え…？」

蓮華は後ろを振り向くと今まで出会ったことのない黒髪の少年がいた。少年は蓮華と同じ視線になるように座り込み

？「本当にゴメン…。君の声が悲鳴が聞こえたから急いで捜して…、

少年が言い終わる前に蓮華は男を抱きしめると再び泣きはじめた。
少年は泣き終わるまで抱きしめたままだった。蓮華が離れるころには30分たっていて雨もやんでいた。

蓮「ごめんなさい、いきなり抱きついてしまつて。しかも雨がやむまでなんて……」

？「あゝ、気にしなくていいよ。君みたいな美人な人にももらえるなんてラッキーだから。」

蓮「び、美人……」

美人と言われ蓮華は顔を赤くした。

？「さうで、とりあえずこの坂を登らないとな。」

蓮「待って！あなたは助けに来たつて言つたけどどうやって私を助けるつもりなの？」

？「その、君には少し恥ずかしい思いするかもだけど、いいかな？」

蓮「この際、恥なんてないわ。あなたに全て任すわ。」

？「分かつた、それじゃ……」

そう言う少年は蓮華をオンブすると人間とは思えないほどの跳躍力で約10メートルの坂を一瞬にして登りきつた。蓮華は驚きすぎて声が出なかつた。

？「今から君の学校のバスまでゴメンけどオンブしていくから。」

蓮「い、いいわよ！そこまでしなくて！」

？「そうは言うが君は足を痛めてる。最悪ヒビが入つてるかもしれない。そんな君がこの山から降りられると思つてるの？」

蓮「そ、それは……」

？「君は1番上のお姉さんでしつかりしないといけないという意識を持つてると思う。それはいいことだけど時には誰かに甘えてもいいと思うよ。1人では出来ない事だつてあるんだから。」

蓮「待って！何で私が長女つて知つてるの……？」

少年は何も答えず、その質問に答えることはなかつた。

しばらくすると蓮華たちが乗つていたバスが見えてきた。すると、

バスから何人かの生徒が降りてこっちに向かってきた。来たのは星華、蘭華、愛華、薫、千春だった。
星「蓮華姉様！大丈夫ですか！？」

蘭「うわぁ、泥だらけだよ！」

愛「足が腫れてます、遠足が終わり次第すぐに病院に行きましょう。」

薫「…。」

その時薫は何も言わず少年を見ていた。

ち「お兄さん蓮華を助けてくれてありがとう！」

？「当然の事をしただけです、それでは。」

そう言うつと蓮華を星華にオンブさせ、少年は再び山の方へ向かって行った。

蓮「結局彼の名前聞けなかった…。そう言えば缶けりはどうなったのかしら。」

愛「結論から言うつと私達の勝利です。薫さんの缶の所へ行った星華姉様と私でしたが誰もいないため簡単に倒しました。」

薫「あのバトルは楽しかったね！」

杏「またしよう。」

バトルを思い出したのか2人は握手をしはじめた。

星「まあ体力もかなり残っていたから、春野さんのも倒しちゃった。それで残りの柊さんだけど…、」

星華が言葉を濁らしているとききなり美玲と可奈が現れた。

美「それを私が華麗に倒したの！」

可「正確には、道に迷っていつの間にか山を登っていていつの間にか柊さんの缶の所に来ていたわけなんだけどね（汗）そう言えば柊さん見なかったね。そして今もないけどさあどうしたのかなぁ？」
ち「え！？薫に続いて諒華も缶の近くにいなかったの！？何やってんの！？」

蓮「ねえ、アナタ達が諒華の缶を倒したのいつ？」

美「んーとね、地震が終わってちよつとしてからだね。」

美玲が言い終わると蓮華が震え始めた。

蓮「もしかして、あの地震に巻き込まれたの……？だって私も巻き込まれたのよ。諒華だって巻き込まれていてもおかしくない……。」

皆「！！」

ち「ヤバイよ！早く助けに行かないと！」

蘭「そうだよ！雨がやんでるとはいえ地面はぬかるんでるから危ないよ！」

皆が慌てていると蓮華がパチーン！と手を叩いた。すると皆は蓮華の方を見た。

蓮「落ち着いて！とにかく今は先生に状況報告をするべきでしょ！」

星「さすが姉様。冷静に対処してる。」

愛「それが1番だと思います。では私が先生に報告を……、ん？蓮「どうしたの？」

愛「あれは……、柊さんだと思います。」

愛華がいい、山の方を見ると諒華が歩いて来るのが見えた。諒華は皆が見えると走ってこっちに向かい土下座をしてきた。

よく見るとスカートなどは泥で汚れていた。

諒「本当にごめんなさい！山にいたとき降った雨で地面がぬかるんでいてその地面で足を滑らしてしまつて服を汚してしまつてさつきまで汚れを落としていたの！遅くなって本当にごめんなさい！」

ち「まあ無事でよかったよ！って言うか缶けり諒華いなかったから負けちゃったじゃん！」

諒「ゴ、ゴメンナサイ……。」

諒華が千春に謝っているとこっちへ先生が向かってきた。

関「みんなあー！そろそろ時間だから戻ってきてえー！って2人もどうしたの！？」

諒「こ、これは……。」

すると、関野先生は顔は笑ってるが目は笑ってない顔で

関「明日、この事に関わっている人は放課後全員職員室前に集合ね。」

と言ったものだから

皆「はいっ!!」

と元気よく答えた。次の日、缶けりに関わった全員、関野先生からかなり怒られた。その時の先生は鬼にも見えた。この時皆は思った。

（関野先生を怒らせてはダメだ。）

第11話缶けり大会（後編）（後書き）

蓮華に少年とのフラグをたたせました。その少年が誰なのかは分かつと思いますがあえてまだ書きません。

あとすみません、今週は忙しい為、プロフィールは書きません…。次こそは必ず！

感想・アドバイスお待ちしてます。批判などはやめてください。

第12話（前書き）

今回も短めです。そして今回プロフィールが異様に長く詳しく説明しています。（のちのちいろいろと出していきたい為。）

え？プロフィール長く出来るなら、本文長くしてほしい？すみません。こっちの方が思い浮かびますorz。

そしてテスト週間中に投稿しました。テスト何それ？おいしいの？今回はプロフィールを前書きと後書きで分けます。プロフィール第5段パート1です。

しみずれんが
清水蓮華

身長162センチ

体重？？キログラム

スリーサイズ

85 / 53 / 86

髪色桜色

性格

妹思い。真面目。世話焼き。冷静沈着。負けず嫌い。（隠し甘え
たがり）恋愛に少し鈍感。

その他

清水財閥の4姉妹（4つ子）の長女。長女の為、親から厳しく育てられた。だがそのおかげでいろいろな事を器用に行う事が出来るようになった。妹には苦労している所を見せたくないため優しく接している。その性格が学校でも出ており誰にでも優しく接している。中学の時は共学で弓道部に入っていた。弓道部では部長を任されるほど、腕前は凄かった。中学は共学で1日、10通以上ラブレターをもらい、1日に5回は学校内を始め、他校の男子から告白されたが全部ふっている。ラブレターは謝りを入れて全員に返信している。断る理由としてはまだ恋愛についてイマイチ分からず、姉妹の世話の方が大切だから。（ ）は本当に信頼出来る人の前でのみ現れる。

しみずせい
清水星華

身長153センチ

体重42キログラム

スリーサイズ

71 / 46 / 74

髪色薄い水色

性格

姉妹想い。軽い猪突猛進。ポジティブシンキング。友達想い。からかい好き。

その他

清水財閥4姉妹（4つ子）の次女。頭に姉からもらった白いベレー帽に似た物をかぶっている。小学生の時まではふざけた事をしては先生に怒られたりしていたがある時、星華が先生に怒られているのは蓮華がしつかりしてないから。と怒られているのを見て以来、ふざけた行動をするのはやめた。そして姉の為に私も頑張らないといけないと思い、姉に協力している。だが未だに人をからかう事はまだやめる事ができてない。小、中学共に同じ学校に通った。中学の時は剣道部に入っていて、剣道部部長を任されていた。顔は可愛い方で中学の時は蓮華ほどではないがモテていた。だが告白されてもふっていた。理由は蓮華のサポートをしたいから。

ちなみに4姉妹の中で一番の貧乳。本人も自覚しており、乳の話には敏感。その話題に触れるとキレる。

第12話

遠足から8日後、蓮華と諒華の二人は放課後、教室の掃除を行っていた。本来教室の掃除は班が分けられていて今週は二人とも掃除をしなくてもよかったのだがこれには理由があった。

***** 遠足の翌日の職員室

関「まああんまり罰なんてしたくないんだけど、二人は私やクラスみんな、心配をかけてるし、はじめとして柊さんと清水（蓮華の名字）さんには今日から1週間教室の掃除をしてもらうわ。二人だけだね。」

蓮「確かに、皆さんにご迷惑をかけたから仕方がないわね……。」

諒「ちょっと待ってください！何で二人だけなんですか！？他の皆はどうなんですか！？」

すると先生はため息をついた。

関「最後まで話を聞きなさい。まあ多少ならはしゃいでもいいって言った私も悪い所もあるから、1週間だけでいいから。そして終わったらこれをあげるからさ。」

そう言うとき関野先生はカバンを探り小さな小箱を出した。その中には青く丸い石をはめ込んだ指輪と赤く丸い石をはめ込んだ指輪が入っていた。

蓮「綺麗……。」

関「この指輪はね、指輪をずっとはめて願い事を願うとその願いが叶うんだって。」

諒「正直言って胡散臭いです。」

その言葉を聞き先生はニヤリツと顔をにやけた。

関「本当に叶うんだなあ〜！だって私この指輪のおかげで初めて彼氏が出来たから！」

蓮&諒「ええ〜！」

諒「先生、そんな事の為に願い事を使っただんですか？」

蓮「と言うより先生、今まで彼氏と付き合っただ事なかったんですか？」

すると先生は青筋を立て

関「驚く所はそこなのかしら？それよりあなたたち罰を一年間に延ばしてもいいわよ。」

すると、二人は即座に90°の角度になり謝った。

関「全く…。とにかく掃除をやることいいわね？」

***** 蓮「やっと掃除終わった〜！」

諒「これで明日から自由だ！I・m・freedom！そう言えば足はもう大丈夫？」

掃除を始めてから二人は少しずつ仲良くなった二人は今では、敬語は止めて普段の言葉を使っている。

蓮「ええ、もう不自由なく歩けるわ。そうだね、諒華今日は暇かしら？」

諒「そうだね、《プルルルルルル》ゴメン電話だ、もしもし。」

電話の声は薫からで、声はいつもより真面目な口調だった。

薫「諒、ちょっと今から話したい事があるんだけどいい？場所は君の寮で。」

諒「了解。」

蓮「どうしたの？」

諒「ゴメン、用事が出来たから帰るね。あ、指輪は私の分もあげるから何かに使ってね！それじゃ！」

蓮「あ！行っちゃった…。とりあえず、職員室に行こうかな…。」

***** 諒華の部屋

部屋に急いで帰ってみると、薫がベットに座って待っていた。

諒「んで、どうしたんだ？何か重要な話なんだろう？」

薫「諒に言わないといけない点が2点あるの。1点目は遠足の件についてなんだけど、蓮華さんにあなたの正体はまだバレてないよ。

一週間見てきたけど、気づいてる様子はないから。」

すると、諒華はほっとした。

諒「正直男に戻った状態で助けたから少し不安だったよ。あとサンキューな、俺の男用の服準備してくれてて。おかげで助かったよ。」
諒華はブレスレットを取り外す、ブレスレットは以前諒が持っていた服に変わった。

薫「一応、念には念を入れとかなないとね、だって戻ったのはいいけど女子の制服でいるのは嫌でしょ（笑）」

諒「当たり前だ！それで2点目は？」その事を聞くと薫は笑い顔を止めた。

薫「今から話すこつちが本当に重要ね。神様があなたの存在を少しだけ疑問を思いうようになり始めたの。」

諒「！？」

薫「原因としてはあなたが男に戻ってそして蓮華さんを助けた時にたまたま、その世界を神様が見ていたらしいの。その時に疑問を持ち始めたらしい。あの動きは本当に普通の人間が出来るのか？ってね。まだ、そこまで気にしてないらしいし、私も一度黄泉の世界に戻っている調べてみるから。」

諒「すまないな、わざわざ俺の為に…。」

薫「いいよ、気にしなくて。それより謝るよりありがとって言うてほしいかな。」

諒「本当にありがとう。感謝している。」

すると薫は顔を赤くしながら

薫「別にアンタの為にやってるんじゃないんだからね！ただ私も巻き添えにくraitたくないから仕方がなくやっているんだから！」
と言い部屋を出ていった。

諒「俺、薫怒らせちゃたのかなあ…。」

諒華は部屋で1人呟いた。

夕食を自分で作り食べ終わった頃に携帯が鳴った。画面を見ると薫からだった。

「言い忘れてたからメールで伝えるけど明日校長室に行つてね。あなたに用があるらしいから。」

諒「用事？いったい何だろう？まあ明日になったら分かるか。」

諒華はその後風呂に入り、部活にまだ入ってないことを思い出し、どの部に入るかを考えながら眠りについた。

第12話（後書き）

プロフィール第5段パート2です。早くもネタがないため、髪形とかが浮かびませんorz

そしてここで謝らせてください、10話2ページの愛華が愛花になつていました。正しくは愛華です。ではプロフィールです。

しみずらんか
清水蘭華

身長153センチ

体重44キログラム

スリーサイズ

77 / 55 / 77

髪色薄緑色

性格

姉妹想い。アグレッシブ。どんな困難も気合いと根性とたい焼きで乗り切る。友達想い。努力家。

その他

清水財閥4姉妹（4つ子）の三女。姉達に甘えながら育った為、アグレッシブな性格となったが、姉達には迷惑をかけないようににはしている。姉二人を見て育っているため、恥をかかないように陰ながら勉強等を努力しているがそれでも成績は4姉妹の中で一番悪い（それでも学年で50番以内）。スタイルは星華には勝っている為、度々スタイルでからかう事をする（特に胸）。その為、毎回喧嘩になる。だが蓮華、愛華には負けている為、自分も少し気にしている。そして櫂堂 けやきどう のたい焼きを愛し、みなからたい焼きマニアと言われ、たい焼きがあれば何でも気合いでやりきる。中学は姉と同様、同じ学校に通っていた。そして部活は陸上部に入っていた。1年の終わりまではレギュラーに入れなかったが2年の始めにレギュラー入りを果たし3年生の時に短距離100メートルで全国大会優勝を果たした。そのおかげで2年の終わりごろから急激にモ

テはじめ3年の時には星華と同じぐらいになった。だが姉と同じく告白はふっている。理由は部活に専念したいから。

しみずあいか
清水愛華

身長157センチ

体重42キログラム

スリーサイズ

80/58/80

髪色薄紫色

性格

姉妹想い。無口。若干人見知り。読者好き。

その他

清水財閥4姉妹（4つ子）の四女。眼鏡をかけている。一番下だけあって両親、姉から一番可愛がられた。だから両親や姉に恩返しをしよう努力している。星華や蘭華が時々暴走することがあるため蓮華がいけないときは愛華が代わりに止めている。それが出来るのも小さい時から蓮華の努力を一番よく見ているからである。小、中学は姉達と同じ学校に通い部活には入らず代わりに生徒会副会長をしていた。ちなみに4姉妹の中では一番モテないがそれでも告られることはあった。だが毎回ふった。理由はまだ自分が誰かと付き合える器ではない。と考えているから。スタイルは星華、蘭華よりいいがスタイルに関しては興味がない。

第13話（前書き）

今回は会話が多いです。そしてシリアスなシーンがあります。それでもよければ読んでください。

第13話

〈諒華の部屋〉

諒「ふわあゝ、朝かあ…。まだ眠たいな…。」

諒華は起きると携帯を確認する。画面にはメール一件と出ていた。

諒「薫からかあ何々、《昨日言った通り今日は1日休むから、先生に伝えといて。追伸一緒に行けなくて寂しいだろう。明日は一緒に仕方がなく行つてあげるからね!》寂しいの薫の方なんじゃないか? まあとりあえず準備して学校行くな。」

***** 学校に着き、1日の授業はあつという間に終わり気づけばもうSHRになっていた。

関「それじゃゝ、そろそろ号令かけるけどその前に柊さんあなたはこの後校長室に行つてね。用件はこれだけ。じゃあ日直号令!」

「起立、礼。ありがとうございました。」

SHRが終わると千春が諒華の所へやつてきた。

ち「ねえねえ諒華何かやつちつたの?」

諒「さあ…?」

ち「後で何があつたかメールで教えてね!」

諒「了解。」

千春はその言葉を聞くとスグに帰っていった。

諒「それじゃ向かいますかな。」

***** 校長室〉

諒華は校長室に着きドアをノックすると「どうぞ」と女性の声が聞こえたので「失礼します」と言い、中に入る。部屋の中には各部活のトロフィーやカップなどが飾っており、歴代の校長先生の写真などが飾ってあった。そして椅子に若い女性が座っていた。

?「いきなり呼んですまないね。」

諒華は視線を話している人の方へ戻す。

諒「いえ、大丈夫ですが……」

千「そう言えば自己紹介してなかったね、私は千歳沙紀^{ちとせさき}。この学校の校長よ。入学式も急遽教頭先生にやってもらったから分からないよね。」

諒「（この人が校長！？明らかに若いよな……）」

千「自己紹介も終わったし本題に入ろうかな。」　そう言うと千歳は諒華の頭、顔、胸、腰、尻、太もも、足をじっくりと見た。

諒「あ、あの……」

千「いやあゝ凄いな！本当に女の子の体になってるんだね、篠崎諒君！」

諒「え、今なんて？」

諒華は驚いていた。諒華の正体は自分が知る限り薫しかいなかった。なのに、会って間もない人に自分の正体がバレるとは　思ってもいなかった。

千「だから、君は篠崎諒君でしょ？」

諒「……」

千「何ならこれも言おうか。君は生前、家に強盗が入り姉を庇って代わりに刺されたけど、神のミスで軽傷が死に繋がるものになり亡くなった。他にも言っと、君は弓道部で部長をしていたんだよね。」

諒華は何も言うことが出来なかった。何故なら今彼女が答えた事は全て正しく更に薫に言っていないことまで答える事が出来たから。

諒「千歳沙紀校長、あなたはいい……」

千「まずは、私が何者かを言った方がいいわね。簡単に言くと私は神様だった。『だった？』また後で話すわ、神にもランクがあり、薫が行っているのは三途の川の門番、主に下級が行うわ。そして上級になると土地の管理を行う、土地神、人間の生死などを扱う^{めいがみ}命神、時を扱う^{ときがみ}時神などいたわ。その中で私は、犯罪等を起こしその後死んで黄泉の世界に來た者を裁く^{つみがみ}罪神をしていたわ、まあ俗に言う閻魔ね。」

諒「何か凄い話だな…。」

千「次に何故君の正体が分かったかについてだけどあなたの体は下級と言っても魔法を使って出来てるよね、魔法を使われてる、使ってるものには自然とオーラが出ているの。そして魔法を使うものはそのオーラが見えることが出来るから、私達神には一瞬で分かって詳しく調べたら君は特殊な事情で魔法を使われている状態って気づいた訳。」

話を聞いてる中で諒華は1つ聞きたいことがあった。

諒「あの、1つ質問いいですか？」

諒「あなたは私の正体を知っていますよね。以前薫に言われたのですが、以前の私を知るものに見つかったら再び死ぬと。そしてこうも言っていました。神のミスで諒は死んだと。そしてあなたは上級の神様です。あなたは私に用事があると言いましたが、あなたの本来の目的は私を殺し、神のミスをなかつたことにすること。違いますか？」

諒華の話を黙って聞いていた千歳は話が終わると急に笑い始めた。

千「ハハハッ！まさか私の目的がバレるとはね！そのとおりだよ私が君を呼んだのは君を殺し再び黄泉の世界に戻す為だよ！そして無断で蘇らせた薫の処刑もね！」

千歳はどこからか出した日本刀を諒華の首にあてる寸前で止める。

千「どうしたの？何か命乞いとかしないのかな！」

すると諒華は顔をフツとする。

諒「俺はもう一度死んだ身なんでな、悔いなんてない。ただ言うなら薫は見逃してくれ。」

その言葉を聞き千歳はキョトンとする。

千「自分の命より相手の命が大事なの？」

諒「そうだ。俺が今いられたのも薫のおかげだ、自分だけが生きて薫が死ぬのは自分が死ぬより辛いから。だから薫には手を出さな、手を出したら黄泉の世界でお前の首を噛みちぎってやる。」

千「そう。だったらお望み通り殺してあげる！」

諒華は目を閉じた。斬られるのを覚悟をしていた。だが、いつまでたっても斬られる事はなかった。目を開けると刀を収めた千歳がいた。

千「合格！」

諒「え…？」

千「ごめんね、騙すような事をして。さっきのはあなたを庇うに値するかを確認する為のテストだったの。君は自分より相手を大切に思える優しい人間って改めて分かったからね。」

諒華は何も言えなかった。いきなりの変化にまだついていけてなかった。

千「安心して、私はあなたを守るし、薫も守るから。」

諒「それは信じてもいいのか？」

千「すぐには信じれないかもしれないけど、信じてもいいわ。信頼の証としてこれをあげるわ。」

そう言うのと1本の日本刀を出した、だが明らかに違うのは全体的に黒く染められていた。

千「これ、私の愛刀。名は虎鉄^{こてつ}。これをあげるから少しでも信頼してほしいかな。」

諒「いやいや、さすがにこんなのもらえないって！」

千「いいの！あなたにはいずれあげるつもりだったし。と言うより受け取りなさい！」

諒華は半強制的に刀を手に入れた。

千「その刀はブレスレットに入れたから出したい時にいつでも出せるわよ。」

諒「なあ、1ついいか？」

千「何？」

諒「何故俺を助けてくれるんだ？千歳先生、『沙紀でいいわ。私の前だけだったら先生とかいらなから。』沙紀は、上級の神だろ、俺を庇うのはマズイのでは…？」

沙「大丈夫私は元、神だから。」

諒「何かあったのか？」

すると沙紀の顔が少し悲しげな顔をした。

沙「まあいつか話すわ……。」

諒「無理に話さなくてもいいぞ。」

沙「ありがとう。私は元とは言え上級の神で魔法も使える、それも薫より強力な魔法をね。何ならネックレスなしで女の体にしようか？」諒華は悩んだ。こうすれば完全にバレル事なく生まれ変わった姿で新たな生活がする事が出来る。だが、その時何故か薫の顔が浮かんだ。

諒「いや、いい。やめておくよ。」

沙「そう、まあ気が変わったらいつでも言つて。そして代わりにだけど学校の敷地内では私以外の神に君の正体がバレル事がないように結界はつておくから。」

諒「何から何まですまないな。」

沙「気にしないでいいわ。そのか・わ・り、頼み事あるんだけどいい？」

顔がニヤニヤした顔に変わった為、諒華は何故か汗が出てきた。

諒「な、何かな？」

沙「それはねえ、あなたには先生になつてもらうわ！」

諒「はいっ!？」

沙「と言つても正規ではないんだけどね。」

諒「どう言つことだ？」

沙「この学校には男の先生がほとんどいないの。いても40〜50代の先生のばかりね。毎年何人か先生を募集するんだけどなかなかこの学校に来ない上に来ても女性ばかりでね、7割近くの生徒から不満が出てるの。だから君が男に戻つて先生になつて生徒に指導したら喜ぶと思うの！」

諒華はそれを聞き、嫌な顔をした。

沙「正直な話、この話が君を校長室に呼んだ理由だよ。」

諒「ぶつちやけすぎだよ、この人！それに！」

諒華はネックレスとブレスレットを外し、諒に戻った。

諒「俺、マジでモテなかったですよ！こんな顔だし、女子からも告られる所か話しかけられるなんてほとんどなかったから！」

沙「（それは、女の子がオクテだけで、諒としての顔を初めて見たけどなかなかにかっこいいじゃない。）」

諒「でも、沙紀が俺の手助けをしてくれる上に刀も貰っているから、引き受けるよ。ただし、絶対に皆にバレないようにしてくれ。」

沙「分かってるわ、そこは任せて。あとあなたには補習や赤点の追試対象者の勉強を教えてあげてほしいの。手伝ってほしい時は連絡入れるからあなたのメアドと電話番号を教えて。」

諒「分かった。」

こうして、2人はメアドと電話番号を交換した。

沙「これで、私の用件は終わりだからもう戻ってもいいわ。」

諒「分かった、ありがとな沙紀！」

沙「（何あの笑顔！恥ずかしくなるくらいいい笑顔じゃない！）どういたしまして。」

諒は再びネックレスとブレスレットをつけた。

諒「それじゃ、また。」 バタンツ！

沙「顔はカッコイイ上に鈍感、諒君が授業やつてもちゃんと授業になるかなあ…、皆テンション上がりそうだし、今思えばほんの少し間違えたかも…。」

その後、部屋に戻った諒華はブレスレットから刀を出した。

諒「これ、貰ったけどどうしよう…。」

するといきなり空間から薫が現れた。

薫「ただいま！」

諒「いきなり出てくるな！」

薫「気にしない、気にしない！ってその刀、虎鉄じゃない！何で諒が持つてるの！？」

諒「ああ、それは…。」諒は今日あった事を薫に話した。

薫「まさか、そんな事があったなんて…。そして沙紀姉さんが愛刀の内の1本をあげるなんて。」

諒「沙紀姉さん!？」

薫「え、聞いてないの？私は沙紀姉さんの妹なのよ。」

諒「聞いてねえ！そう言えば、薫の事を神崎じゃなく薫って言うてた！でも名字が違うじゃん。どうしてだ？」

薫「まず、私と姉さんだけど実はあなたと同じで一回死んでるのよ。」

その事実には諒は驚いた。

薫「今からちよつと長くなるけど私の過去の話きいてほしいけどいい？」諒「構わない、辛くないのなら。」

薫「辛くないから大丈夫。死んだ理由としては私は当時病気で治療すれば治る病気だったんだけど私達の両親は幼い時に早く亡くなつて、凄く貧乏だったから姉さんが必死に働いていたの。だけど治療できるだけのお金が稼げなくて亡くなったの。その後に無理していたせいで姉も私と同じ病気になって亡くなったの。」

諒「…。」

薫「その後死んだ魂は黄泉の世界に向かったわ、魂は未練があればその世界で未練を無くした時に改めて生まれ変わる事が出来るの、その時には全ての記憶を捨ててね。だけど私には未練がなかったの。姉さんの姿をずっと見てきたから。でも姉さんには未練があった。私を助けられなかったことに對して。未練があったらいつかは生まれ変わり離れ離れになってしまう、それは嫌だった。それを知った命神が私達に神にならないかって言うてきたの。それがきっかけ。その後は適正試験を受けて私は下級、姉さんは上級の神になったわけ。そして上級神には何故か別の名字にしないといけないかったの、だから姉さんとは違う名字なんだよ。でも神になってよかった。神になれば姉さんとの記憶を失わないですむ上に一緒にいられるからよかったの。」

諒「…。」

薫は時間を確認する。

薫「うわ！もうこんな時間！そろそろ帰るね！あと虎鉄大事にしないよ！何せ上級の神にならないと貰えないんだからね！」

ビューン！

薫はワープを使い部屋へ戻って行った。

諒「薫、辛かったのに無理に話しやがって、馬鹿野郎。途中泣いていたじゃねえか…。いや、止めれなかった俺の方が大馬鹿野郎か…。」

「
諒華は泣いた。自分だけが苦労していると思っていたが、薫の方が苦労していた事に気づけなかった事に。」

第13話（後書き）

今回は薫と沙紀の過去について書いてみました。だけど文才がないため、ちゃんと伝わったかが不安です。

沙紀のプロフィールはあと何人か新キャラが出たらするつもりです。感想・アドバイスお待ちしてます。批判などはやめてください。

第14話（前書き）

今回もギャグがほとんどないです。しかもまた悲しい話になってます。更に文章も会話文がかなり長くなってます。あれえー！？何ででしょうか！？

諒「それはあんたの文才がないからだ。」

作者「あ、納得！」

まあこんな感じですがそれでもよければどうぞ！

第14話

時は少し遡り、諒華達が入学する前の3月に戻る。

「弓道場」

弓道場の前には2人の少女がいた。1人は袴に着替え、もう1人は制服の姿だった。

「どうしましょう、先輩…。今年入部する人がいなければ…、今年先輩と私だけだ…。」

「そうね。先輩も引退して私の代で1人、柊の代で1人しかいない。正直廃部になってもおかしくないわ。」

「私は嫌です！無くしたくないです！」

柊は涙目になりながら先輩に訴える。

「そうは言ってもこの学校では女子の中でも人気があまりない部だし…。」

柊「先輩は誰かに声をかけましたか？」

「かけたわ。だけど今さら弓道入っても…、って人が全員でね…。」

あなたは？

柊「私も駄目でした…。ああっ！」

「何、どうしたの？」

柊「先輩、忘れてました！私の妹が今年入学してくるんです！」

「本当！？」

柊「はい！私が頼めば入ってほしいとお願いすれば入ってくれます！」

「ただ、無理矢理入れるのはあまり出来ないなあ…。」

柊「大丈夫です！私に任せてください！弓道の魅力をちゃんと説明しますから！」

「なら任せるわ、瑞希。」

「諒華の部屋」

諒華は思いつきり泣いた後、風呂に入っていた。あの話を聞いた後だからなのか、ボーっとすることが多く、いつもより長く入っていた。風呂から上がり髪を乾かしていると一通のメールが届いた。諒「ん、誰からだ？瑞希？えーと、だれだっけ？内容は何々？《明日の放課後弓道場に来てほしいなあ、お姉ちゃんのオ・ネ・ガ・イ！》ああーそっぴゃあ、姉貴がいるって言ってたな。とりあえず、明日は弓道場よってみるか。あれ、まだ下に文がある。《追伸諒華ちゃんの友達もたくさん連れてきてほしいなあーそしたらイッパイなでなでしてあげるから！諒華ちゃんが大好きな瑞希より》…………、寝るか。」

諒華はメールを見終わるとメールを消し、すぐに寝た。

〽次の日の放課後〽

諒「ゴメンね、今日は付き合わせちゃって。」

薫「私は興味があつたから別にいいよ。」

恋「諒華さん、今日はお誘い頂きありがとうございます。」

蓮「私も興味があつたから、ちようどよかったわ。」

愛「私は蓮華姉様が行くと言ったから……。」

諒華が昨日の夜から連絡をかけたところ集まったのは、薫、恋、蓮華、愛華の4人だった。

諒「もう少しで着くわね……、あれ誰かこっちに向かってきてる？」

？「諒ちゃーん！」

諒ちゃんと呼んだ少女は諒華に向かって飛び込んできた。

瑞「諒ちゃん！諒ちゃん！諒ちゃーん！やっと会えたね！あなたの大好きな瑞希お姉ちゃんだよー！」

いきなり飛び込んできた瑞希を受け止める事が出来なかった諒華は共に倒れる。瑞希は諒華を抱きしめると頬擦りをし、甘える。この姿に、皆は啞然としていた。

諒「や、やめてよ！姉さん！」

瑞「！？」

瑞希は何かに驚くと立ち上がった。

瑞「ゴメンなさい。最愛の妹に会えて、ついテンションが上がってしまったわ。改めまして自己紹介を、私は柊瑞希^{ひいらぎみずき}、諒華の姉よ。」
蓮「あなたが2連続1位という2冠を果たしてる瑞希先輩ですか！？」

瑞「まあ、たまたまなんだけどね。あなた達に来てもらったのはお願いがあつて来てもらったの。詳しくは弓道場にいる葵湊^{あおいみなと}先輩から話を聞いてほしいわ。私は諒ちゃんとちょっと話をしたいから皆は先に行っておいて。」

そう言うとき諒華以外の皆は弓道場に向かった。

瑞「ここで話すのもアレだから私の部屋に来て。」

***** 瑞希の部屋

瑞「さて、単刀直入に聞いわ、あなたは誰？」

瑞希は部屋の鍵を閉め諒華の方を向くと真面目な顔を言った。

諒「え？私は諒……」

瑞「私は騙されないわ、あなたは諒華だけど諒華じゃない。私が飛びこんだ際あなたは嫌がった。いつもなら喜んでいたのに。」

諒「それは、流石に人前ではやめてほしいから……」

瑞「あなたは人前でも平気でいたわ。もう1つあってね、これが決め手だわ。あなたは私の事を姉さんって言った。あなたは私の事は《瑞ねえ》って言ってたはずだわ！」

諒「……」

瑞「もう1度聞いわ、あなたは誰？」

諒「実は……」

諒華は今までに起きたことを全てを瑞希に話した。話を聞き終わると諒華は疑問に思っていた事を聞いた。

諒「あの、どうして別人だつて分かったんですか？」

瑞「私も記憶が消されていたけど、今全て思い出したわ。」

瑞希は悲しそうな顔をしながら理由を話し始めた。

瑞「諒華は実際にいたの。歳も今あなたと全く同じでね私達3姉妹は仲良く過ごしていたわ。だけど、私が高1の1月だった。諒華が交通事故にあったの。私達は病院に急いだわ、だけどその頃にはもう息をひきとっていた…。後で聞いた話だけどね、諒華が買い物から帰っていた時に幼稚園ぐらいの子が横断歩道が赤信号だったのに渡ろうとしてたらしいの。その時に車がスピードを飛ばしてた車がいてね、このままじゃひかれると思った諒華がね、飛び出し、その子を突き飛ばしたの。だけど代わりに諒華がひかれたわ。諒華はすぐに救急車で運ばれたわ、救急車で運ばれてる間、最後に言った言葉が『あの子は無事?』らしくてね、大丈夫だよって聞くと笑顔になつたらしいの。その言葉を最後に何も言わなくなつてその後病院で急いで手術したんだけど手遅れだった。」

言い終わると瑞希は泣いていた。それでも話を続けた。

瑞「悲しかったわ、最愛の妹が、亡くなったんですもの。その日から柊家は変わったわ、父さんや母さんは数日後に事故にあつて意識不明の重体、私は笑う事が出来なくなつて、明は話すことが出来なくなつた。辛かった、諒華が死んで両親が意識不明、明は話すことが出来なくなつたんだから。それでも私は毎日神社にお参りに行つたわ、父さんや母さんの意識を取り戻してください、明を話せるようにしてください、そして諒華を生き返らせてくださいってね。そして3月になつたら急に諒華が死んだ記憶が無くなつて諒華がいたの。諒華がいたいつもの生活に戻つたの。それが当たり前のようになつていた…。あなたが諒華じゃないと分かつた時、あなたには本当に悪いけど正直な話ショックだった。」

諒「瑞希さん…。」

瑞「長くてごめんなさい、私の話はこれでおしまい。だけどね、私はあなたに『ごめんなさい…。』え?」

瑞希が言い終わる前に諒華は瑞希に謝つた。

諒「ごめんなさい…。俺が転生したから瑞希さんにもう1度諒華さんの死を思い出させてしまつて。本当にごめんなさい…。俺が素直に死を受け入れ死んでいれば瑞希さんにもう1度辛い過去を蘇らせる事はなかつた…。今からでも薫に言つて本物の諒華さんを『そんな事言わないで！』」

瑞希は泣いていた。目を真つ赤にさせながら。

瑞「あなたが諒華じゃないのは確かに悲しいわ！アナタが諒華じゃないと分かつた時、全てを思い出し、再び諒華の死を思い出したんだから！けどあなたがこなければ私は笑顔を取り戻す事が出来なかつた！明は話す事が出来ないままだつた！父さんや母さんだつて意識不明のままだつた！元に戻る事が出来たのもあなたが来たからなのよ！だからそんな悲しい事を言わないで！」

諒「瑞希さん…。ごめん…。」

瑞「さつきは言えなかつたけどね、あなたに会えて本当によかつたと思つてるの。あなたが諒華じゃなくても、あなたのおかげで元に戻る事が出来たのだから。だからあなたは諒華の代わりに諒華として生きてほしいな。」

瑞希は抱きしめるのをやめると諒華の顔を真つ直ぐ見つめ言つた。

諒「分かりました、諒華さんの分まで精一杯生きます。諒華さんにはなりきれないかもしれないけど頑張つてなりきります。」

瑞希は首を横に振つた。

瑞「あなたはあなたなんだから、なりきらなくてもいいの。だけど…。ちよつとお願いあるんだけど…。」

諒「何ですか？」

瑞「私の事を瑞ねえつて『勘弁してください！』え…。」

瑞希は恥ずかしながら言つたが、諒華に即答された。

諒「恥ずかしいです！」

瑞希は泣き真似をしながら上目遣いで言つた。

瑞「言つてくれないの…？」

諒華はその上目遣いにやられた。

諒「（それは反則だつて！）分かりました…、せめて慣れてからにしてください。それまでは姉さんにさせてください。」

瑞「分かった、だけど、一回だけでいいから瑞ねえって呼んで！」

諒「……………瑞ねえ…。」

その言葉を聞いた瞬間瑞希は再び諒華を抱きしめ頬擦りをした。

瑞「諒華！諒華！諒華！諒華！諒華っ！大く好き！」

諒「ちよっ！姉さんやめ！やめて！やめて！うわあ！」

瑞希のラブラブタイムは10分間続いた。

瑞「いやあ、ゴメンね。久々にやったからつい嬉しくて長くなっちゃった。」

その言葉を聞いて瑞希が諒華とこういう事を出来なくて寂しかった事を諒華は思った。

諒「あ…。たまにならやつてもいい…。」

瑞「でもあなたは嫌なのでしょ？」

諒「これで寂しさを紛らわせる事が出来るのなら、別にいいです。後、一応俺も男だからこんな美人に抱き締められてあんなに異常でなければ嬉しいです。」

瑞「あ…（照）」

瑞希は諒華が元は男だったのを思い出すと顔を今まで以上に赤くした。

瑞「ねえ、あなたは諒だったわよね？男の状態に戻ってくれない？」

諒華はネックレスとブレスレットを外した。

諒「え」と、改めまして篠崎諒です。姉さんいたいどうしたんですか？」

瑞「男のあなたの姿も確認したくてね。カッコいいじゃない。」

諒「はあ…。お世辞どうもです。」

瑞「いや、真面目にカッコいいと思う。」

諒「…（照）」

瑞「（何この子。照れた顔可愛い…。）」

瑞希は諒の照れてる姿を見てそんな事を思った。

諒「あの～もしもし？」

瑞「ごめんなさいね。ちよつと考え事をしてたわ。あと、諒の時は敬語じゃなくていいわ。その方が楽でしょ？」

諒「正直助かる。」

瑞「やっぱり。そうそう、そう言えばあなたは弓道に興味ある？」

諒「あるもなにも弓道部部长だったし、弓道部に入るつもりだった。」

瑞「よかった～！入ってくれるのね！ちよつと不安だったのよ！」

諒「心配しなくてもよかったのに。それより弓道場行かなくていいのか？」

瑞「ああ！マズイ！諒急いで行くわよ！」

瑞希は急いで部屋を出ようとするので諒は急いでブレスレットとネックレスをつけた。

諒「ま、待つてよ！姉さん！」

すると瑞希は止まり諒華に近づき頬にキスした。

瑞「これはお礼！早く行かないと先輩に怒られるから急いでね！」

諒華は一瞬頭の中が真っ白になった。

諒「いったい何が…。って姉さん先に行っちゃってるし！待つてよ～！」

その後弓道場に着いた2人は瑞希は湊から、諒華は薫、恋、蓮華からこんなに遅くまで何があったのか詳しく聞かれた。（適当に誤魔化した。）

第14話（後書き）

本文が長くて分かりづらいかもしれないので時系列でまとめてみました。（うまくまとめれてる自信はありませんが）

瑞希が高1の時、諒華が交通事故により亡くなる。

← その事により柊家が変化。両親は数日後に事故にあい意識不明、瑞希は笑うことが出来ない、明は話することが出来ない。その時から瑞希は神社に通う。

← 諒華が亡くなった年の3月、諒華（篠崎諒）が転生する。転生と同時に諒華が死んだ記憶が無くなり家族は元に戻る。

← 記憶を無くした3月、瑞希は諒華が死んだ記憶がないため、諒華を弓道部に入部させようとする。

← 瑞希は諒華と会うが言動や態度で以前の諒華ではないと分かる。

と言った感じです。もう少し詳しく書くと1月の冬休み中に諒華が事故にありました。その時に瑞希は実家に帰ってました。学校の方針で長期休暇の時は自宅に帰宅させる方針からです。ですが諒華が死んでしまったことから立ち直れず冬休みの期間では無理でした。冬休みが終わって寮生活が再開以降も瑞希は立ち直る事が出来ませんでした。その時から笑顔になることが出来ませんでした。

3月の春休みになり瑞希は1度帰宅しましたがやはり立ち直れませんでした。新学期が始まると言うことで早く戻らないといけなかった瑞希は早く戻りました。戻って数日後に諒華が転生したため、瑞希は弓道場前で会うまで一切会ってません。

これが追加です。これを書いておかないと疑問に思う事が出てくると思うので書きました。多分まだ疑問に思うことがたくさんあると思います。原因としては私の文才がまだまだだからです。このようになつたことを反省しています。出来る限り分かりやすく出来るよう精進します。

感想・アドバイスお待ちしてます。批判などはやめてください。

第15話（前書き）

最近シリアスの方が多いです。この作品は元々ギャグを主流にするつもりだったのに書いているといつの間にかシリアスになっています。

今のところ小説を速いペースで書いていますがテスト週間がそろそろ終わるので更新が遅くなると思います。

初めての作品でいろいろと悩む事があると思いますが頑張っ書いていきたいと思っています。

第15話

〔弓道場〕

湊「瑞希の妹さんが来たので改めて、来てもらった目的を言わせてもらおう。君たちに弓道部に入部してもらいたい。今部員は私と瑞希だけの2人しかいなくて5月までに最低5人集めないとこの部が廃部になってしまうんだ。ぜひ協力してもらえないだろうか？」

湊は頭を下げ、皆に言った。湊の頼みに即座に答えたのは蓮華だった。

蓮「私は入るつもりでしたので、ぜひ入部させてください！」

湊「ありがとう、他の皆さんはどうか？」

諒「私も入るつもりでした。なのでよろしくお願いします。」

恋「私は…、まだ悩んでいます。」

薫「私もです。まだいろいろな部があるので見学してから決めようと思います。」

湊「分かった、まだ入部期間があるからじっくり考えてくるといい。あともう1つ、頼みがある。弓道部の宣伝をしてもらえないだろうか？2年、3年生にはほぼ全員宣伝はしたのだが、手応えが全くなかったのでは…。」

恋「分かりました！それぐらいは出来そうなので協力させてください！」

湊「協力感謝する。もう時間が時間だ。今日は早く帰りなさい。」

その言葉を聞き、諒華、薫、恋、蓮華は帰っていった。

瑞「先輩、これで2人は入部してくれましたけど大丈夫ですかね？」

湊「大丈夫、すぐに集まるさ。それに…、」

湊「それに…、何ですか？」

湊「君の妹の諒華と言ったな、あの子には不思議な力を感じる。あの子達に賭けてみようじゃないか。」

***** 下校中

蓮「それにしても、先輩凄かったわ。20本引いて20本とも中る（あてる）のだから。」

薫「確かに。並の努力でなるものではないと思う。」

恋「あの先輩見てるとあんな風に強くなれるのかなって思っちゃいます…。」

皆の話を聞きながら、諒華は別の事を考えていた。

諒「（瑞希姉さんがあんな風に落ち込んでたんだ。俺の本当の姉さんはいったいどうしてるんだろう？）」

恋「どうしたんですか、諒華さん？何か悩み事ですか？」

諒「ううん、気にしないで。もうこんな時間だし早く帰ろう！お腹すいちゃったし。」

薫「…。」

蓮「そうね。早く帰りましょ。」

薫「ねえ諒。後であなたの部屋へ行くけどいい？」

諒「別にいいけど何か用でも？」

薫「ちよつとね。あ、私の寮こつちだから皆バイバイ！」

恋「私もここで別れです。また明日です！」

蓮「私もだわ。それじゃまた明日。」

諒「薫のやつ、いったい何の用だろう？まあ帰ったら分かるか。」

***** 風呂

諒華は夕食を食べ終え風呂に入っていた。

諒「ああ、肩がこるなあ…、何でだろうな？」

諒華が肩をならしていると風呂の扉がノックされた。

諒「え？」

するとドアが開いた。開けたのは薫でしかも下着姿だった。

諒「うわあ！！！！！！！！ちよ、薫何入って来てるんだよ、あと服着ろ！」

諒華はもちろん素っ裸でしかもネックレス・ブレスレットを外しているため、諒の状態だった。今風呂場には男と女がいるという普通

ならとてもマズイ空気になっていた。

薫「ノックしたからいいよね？『よくねえ、馬鹿野郎！』もう照れちゃって〜！」

諒「照れてない！薫みたいにスタイルよくて綺麗な女性見たら暴走モードに入りそうになるから嫌なんだ！だからだ！」

薫「え？今なんて言った…。」

薫は顔が真っ赤になりながらももう一度聞き直したが答えてはくれなかった。

諒「いいから早く出て！じゃないと篠崎さんは暴走するから！」

諒は立ち上がり薫に言った、もちろん大切な所は隠して。

薫「せっかく体を洗ってあげようと思ったのに…。」

諒「必要ない！だから早く出てけ！」

薫「せっかくのお誘いを断るなんて…。」

薫はしぶしぶ風呂場から出ていった。

諒「あゝあ、あいつまさかあそこまで過激なからかいしやがって…。ちよつと危なかったじゃねえか…。でも洗ってもらってもよかったかも…。」

諒は1割ほど後悔した。

***** 風呂からあがると制服姿に戻った薫がいた。

薫「それじゃ、早速諒に聞きたいんだけど、瑞希先輩に何を聞かれたの？」

薫の顔は真面目な顔になっていた。諒は真面目な顔を見て正直に答えた。（部屋ではネックレス・ブレスレットを外し、諒の状態である。）

諒「先輩は俺を見て、あなたは諒華じゃないって言った。」

それを聞き、薫は驚いた。

薫「そんな！？バレル訳ないはず！記憶を変えたはずなのに！」

諒「俺がヘマをした。行動や言動が違うつて気づいたらしい。」

薫「…。そうだったの…。」

諒「やっぱり記憶を変えても心のどこかに残っていたんだろうな、諒華さんとの思い出が。後な、瑞希姉さんはお前に感謝してる。」
薫「え？なんで？」薫には何故瑞希から感謝されるのかが分からなかった。

諒「諒華さんが亡くなった記憶が戻った事で、2度の諒華さんの死に対して思い出してしまっただけ、俺が転生したから家族が元に戻ったって言うてた。」

薫「そうだったんだ…。瑞希先輩に悪いことしたな…。」

諒「思い出したのは辛いけど今はアナタがいるし、家族が元に戻った事が嬉しい。と言うことも言っていた。だから俺が転生するきっかけを作った薫には感謝してるんだ。」

薫「人の役に立ててよかった…。」

薫は涙を流していた。

諒「そう言うことを瑞希姉さんから聞かれた。それで薫、聞きたい事があるんだが…。」

薫「何？」

諒「俺が転生してから瑞希さんを始め、柊家は元に戻ったけど、転生前の篠崎家はどうなっているんだ？俺が死んだことになってるんだよな？母さんや父さん、姉さんはどうなってるんだ？」

薫「！」

薫は顔を伏せた。

諒「なあ答えてくれ！」

薫「諒のご両親、お姉さんはまだ死のショックから立ち直れていないわ…。特にお姉さんが一番酷い、あなたの死を目の前で見てるだけあって、一番病んでるわ…。」

諒「…。なあ薫、頼みがあるんだ『駄目よ』」

薫「あなたの事だから会いに行きたいって言うんだと思うけど、駄目よ。あなたは死んだの。死んだ人が会いにいったらビックリする上に神様にバレルリスクが高くなる。だから諦めて。」

諒「だけど姉さんの状態を知って何も出来ないのは嫌だ！『いい加

減にして！』」

薫は今まで諒に本気で怒った事はなかった、その薫が初めて諒に本気で怒った。

薫「あなたが神にバレたらあなたは死ぬのよ！私は諒を二度も死なせたくないの！」

諒「……………薫……」

薫「だけど諒は優しいから私が止めてもどうにかあなたのお姉さんを救いたいよね……」

薫は泣きながら、諒に言った。

諒「ごめん……」

薫「だけど、私には無理なの。力がたりないから。もしかしたら沙紀姉さんなら、どうにかなるかもしれない……」

諒「本当かつ！？」

薫「可能性はあるわ。だけど、姉さん今出張中で帰ってくるのは一週間後よ。」

諒「それでもいい。家族を救える可能性があるのなら！」

薫「分かった、一応姉さんには連絡入れておくから。とりあえず、今日は何も出来ないから、私は帰るわ。それじゃまた明日。」

薫はワープを使い部屋へ帰っていった。

諒「初めてだな、薫が本気で怒ったの……。だけど、それでも家族を姉さんをどうにか元に戻したい……」

諒は新たに決意を決めた。

第15話（後書き）

多分自分が転生してこのような状況になったら多分こういう事を考えるだろうと思います。

ギャグをたくさん書きたいのに、シリアスばかりで大丈夫なのかと思うこの頃です（汗）

感想・アドバイスお待ちしてます。批判などはやめてください。

第16話（前書き）

更新が遅くなりすみませんでした。その分、文章はいつもより長めです。

私が作る小説は、ありきたり+いきなりの展開でお送りしてます。そしてかなりのキャラが出てきましたが空気になる場合があるかもしれません。

それでもいい方はどうぞ！

第16話

（一週間後）

薫から沙紀が帰ってきたと聞いた諒華は、薫と共に校長室へと向かった。

諒「薫から話を聞いてると思うが、姉さんや家族を救いたいんだ、だから協力してくれ。」

沙紀は首を横に振った。

諒「どうしてだよ！」

沙「確かに私の力なら会いに行く方法を作れる。だけど、魔法を多く使うからあなたにオーラがよりいっそう分かるようになりあなたの存在がバレる可能性が高くなる。それに会った所でどうやって救うつもりなの？相手は戸惑うばかりだわ。」

沙紀は諒華の目を見つめながら言った。

諒「バレるかもしれない、それで再び死ぬかもしれない。だけどそれでも姉さんを救いたいんだ！」

沙「あなたはよくても、あなたを知ってる者たちはどうするの？もしバレて死んだら皆悲しみ、君の姉や妹は特に悲しむんだよ。君はその人達の事を考えた事がある？」

諒「…。」

薫「姉さん、私からもお願い、諒を手伝ってあげて！」

沙「薫っ!？」

薫からその言葉を聞くのが意外だったのか、沙紀はかなり驚いた。

薫「私も助けてあげたいの！私も協力するから、姉さんも協力して！」

沙「……………しょうがない…、薫まで頼むんだから断る訳にはいかないわね。」

沙紀は頭をかきながらしぶしぶ答えた。

諒「ありがとう沙紀！それで方法とは!？」

沙「方法としてはまず君を一度仮死状態にして魂の状態にする。その後魂を君のお母さんかお父さんに移らせる。そうやってお姉さんと話したらいいんだけど、この魔法を使ってる間、自分が諒だということを言っではいけないの。それは紙に書くとかして伝えてもいけないの。そのルールを破った場合、あなたの魂は消滅する。あとタイムリミットがあつて太陽が沈むまでが私の限界だから。それ以上は魔法力が限界だから。それでもいいならやるけどどうする？」

諒「分かった、俺はいつでも大丈夫。」

沙「分かった、それじゃ薫も力を貸してね。薫は魔力増幅魔法をお願いね。じゃあ魔法を発動させるわ。」

薫「神崎薫の名において命ずる、我が力、千歳沙紀の力となりて、その手助けを果たさん！」

沙「一度果てた魂よ、千歳沙紀の名において今一度魂の再生を願わん！」

薫「これで大丈夫だから諒は目を閉じて！」

諒華は目を閉じる。すると意識がだんだんと無くなっていった。

沙「乗り移らせた後は手助け出来ないからね、後は自分の力で頑張つて…。」

諒華はその言葉を聞き取ると完全に意識を無くした。

*****篠崎家

諒「ん…。ここは…。」

諒は目覚める。目覚めると見覚えのある場所だった。

諒「ここは…、俺んちだ…、帰ってきたんだ…。」

たった数週間なのに凄く懐かしく思えた諒はじっくり眺めていた。眺めながら諒はあることを思い出した。

諒「そう言えば誰に移ったんだろう？」

諒は手や足などを見るが誰か分からず鏡を見ることにした。

諒「なっ！まさかの和人^{かずこ}！？何で！？」

諒が疑問にしていると沙紀の声が聞こえた。

沙「もしもし聞こえるか？」

諒「おい！？何で父さんや母さんじゃないんだよ！？」

沙「それは君の家に今両親がいなくてちょうど君の友達だった和人君が家に来たからその子にしたの。」

諒「そう言うことならまあいいけど……。」

沙「いろいろと言いたい事はあるけどそろそろ通信切るわ。とにかくタイムリミットは太陽が沈むまでだから、こっちから一切の手助けできないから！じゃあ、頑張つて。」

その言葉を最後に沙紀の声は一切聞こえなくなった。

諒「さうで、これからどうしようかねえ……、『ごめんなさいね和人君、急に用事で少し出てしまつて』え？」

振り向くと諒が一番会いたかつた姉がいた。

諒「（鏡花姉さん……。）」

諒は鏡花を抱きしめたい衝動にかられた。だが、今は和人だからそんな事は出来ない為、堪える。

鏡「ゴメンね、急に和人君が来るなんて思つてなかったから。」

和「いえ、こちらこそすみません。急にお邪魔してしまい……。」

諒は姉に敬語を使うのにためらいがあつたが我慢はまだバレないように気をつけながら言つた。

鏡「いいのよ、諒も喜んでくれてるはずだから。」

鏡花は悲しい顔をしながら言つた。

和「鏡花さん……。」

鏡「ゴメン、ちょっと来て。」

諒は鏡花に連れられてある部屋に来了。その部屋は鏡花の部屋だった。鏡花は自分の机からあるものを取り出した。それは一冊のファイルだった。

鏡「これね、諒には見せた事ないんだけどね、諒が中学の弓道やつてる時の写真が入つてるんだ。」

ファイルを開くと大会の時の写真や家で弓具を手入れしている姿の

写真などがあつた。

和「（姉さん俺に興味がないんだと思つてた…。まさかこつそり見てたなんて…。）」

鏡「何でだろう？和人君に急に見せなくなっちゃった。」

和「いえ、全然構いません。むしろ、諒の知らない所が見れてよかったです。」

鏡「ありがとうございます。もう1つ正確には2つかな。諒と特に仲がよかった和人君に諒について本当の事を言いたかった事があるんだけどいいかな？」

和「何ですか？」

諒は鏡花が何を言うのかが若干不安だったが氣になった。

鏡「諒つてね実は本当の兄弟じゃないんだ。」

和「！？」

諒は驚いた。幼いときから篠崎家にいたため、家族の關係に何の疑問もなかった。姉からその言葉を聞くとは思わず何と言つたらいいのか分からなかった。

鏡「諒のご両親は諒が産まれて2年後に交通事故により亡くなったの。親戚に預けようにも親戚も既に全員亡くなつてしまつていてね、誰も引き取り手がいなかったの。その時に私の父が引き取つたの。父と諒のお父さんは大の仲良しで事故で死んだと知つてね、その1人息子である諒を引き取ろうと思つたらしいの。親友の息子を君の代わりに必ず立派に育ててみせるつて決めてね。それで諒が来てくれたんだけど、両親は本当によかつたつて思つてるらしいわ。もちろん私も。」

和「ありがとうございます。姉さん…。」

諒はつい、お礼の言葉を言つてしまった。今は和人だということを忘れて。

鏡「姉さん？」

和「すみません、何でもないです。」

鏡「まあいいわ。あとね、諒は覚えてる？」

和「（諒？）いえ、全く知りません。」

諒は何故和人といわれなかったのかが気になったが鏡花は変わらな
いままだった。

鏡「私が中3のとき、家に帰る途中不良に絡まれてその時諒が助け
てくれたこと覚えてない？」

和「知りません。と言うよりさっきから鏡花さんは私ではなく諒に
言ってるみたいです。」

鏡「だってあなたは諒でしょ？」

諒は答える事が出来なかった。そして何故バレたのかが分からなか
った。

鏡「何も言えないと言うことは、何か訳ありね。理由は聞かないわ。
あと何故分かったかと言うとね、と言うより最初から分かっていた
わ。完璧に分かったのは姉さんって言ったときからけどね。」

和「だけどうして最初から分かったんだ？」

鏡「帰ってきてからの和人君とは何か違うオーラと言うか何か違っ
てて、あとしゃべり方が諒と一緒にだったから。その時点で気にして
ただけだね。あと何年あなたを見てきたって思ってるの？姿が違
っても何となく分かるよ。」

和「姉さん…。」

鏡「それにしても、私は駄目な姉さんね。あなたがいなくなっ
てからずっとふさぎこんでいた。何故私より早く死んだの、どうして早
く言えなかったんだろうって考えてた。だけど、今は諒がいる。だ
からあなたに言いたいことがあるの。」

和「何？」

鏡「私は諒が好き…。付き合っ
てほしかった…。ってね。」

姉から告白を聞き答えを言おうにも諒は頭が真っ白になり何も言え
ない。

鏡「って今言われても困るわよね。あなたは亡くなっ
たんだから。」

今日会いにきてくれたのも私を励ますためでしょ？」

和人（諒）は首を縦に振った。

鏡「ありがとね、諒。あなたにもう一度会えてよかった。すぐには無理だけど立ち直るから。ねえあなたはあとどれくらいここにいるの？」

和「あと5分ぐらいしかいない。」

鏡「そう…、じゃあ最後にお問い合わせしてもらってもいい？」

和「何？」

鏡「私を抱きしめて。」

和「え？姉さ…。」

諒が言い終わる前に鏡花が抱きしめた。

鏡「このままでいて。」

和「分かった。」

二人は時間いっぱいまで抱きしめあった。

***** 和「もうあと30秒ぐらいだから離れて。」

諒はまだ離れたくなかった。出来るなら毎日抱きしめたかった。

鏡「……………分かった。」

鏡花は名残惜しいようにゆっくりと離れた。

和「姉さん、父さんや母さんには内緒にしておいて。本来この事はタブーだから。」

鏡「分かった。」

和「もう時間だから…、行くね…、姉さん。」

だんだんと意識がなくなつて来はじめた。その意識の中で鏡花が諒にキスをした。唇を離れた後、「好きだよ、諒。」と言う幻聴を最後に諒の意識は完璧に無くなった。

***** 鏡花の部屋

鏡「行っちゃったか…、諒がせつかく来てくれたんだし頑張らない

とね！」

鏡花は気持ちの整理をした後、倒れたままの和人を起こした。和「ううん…、あれ？ここはどこだ？何で諒のお姉さんがいるんだ？」

和人は体を起こし座り直す。

鏡「君がね、足を滑らせて頭をぶつけたから私の部屋で休ませてたの。」

和人は何が起きたか分からないため鏡花は嘘をつく。

和「にしても、意識がなかったけど何か懐かしい気持ちになったっす。」

鏡「もしかしたら夢の中で諒に会えたのかもね。」

和「いつまでもくよくよしてるわけにはいかないっすよね。諒が天国で見てるはずなんで。」

鏡「そうね、くよくよするわけにはいかないわね。」

ねえ、諒。私頑張ってみるわ。だからあなたも別の世界で無理しないように頑張りなさい。

***** 校長室

諒「…………、戻ってきたのか…。」

薫「お帰り、どうだった？」

諒「すぐに姉さんに正体バレて、来た理由もすぐにバレた。鏡花姉さんは勘が鋭いから。」

沙「では、君のお姉さんは、立ち直れたのか？」

諒「すぐには無理だけど早く立ち直るってさ。」

沙「人の死にはすぐに立ち直れるはずじゃないけど君に会えてよかったんじゃないかな。あと、これ返すわ。」

沙紀は意識を無くす前に預かったネックレスを返した。諒はネックレスを受け取りつけなおす。だが、何の変化も起きなかった。

諒・薫・沙「え？」

諒は一度ネックレスを外しもう一度つけなおす。だがやっぱり変化はなかった。

諒・薫・沙「うそっ！！」

諒「え！？何で！？」

沙「待て、私の魔法で強制的に女に！」

沙紀は呪文を言い、諒にかける。だがやっぱり変化はなかった。

薫「姉さんがうっかりネックレスに水をかけたとか？」

沙「いや、かけてない。しかも、魔法を使ったら強制的になるはず。どうして…。」

諒「もしかして、力を使いすぎて一時的に魔法が弱くなりこうなったんじゃない？」

沙「それなら納得はまだ出来るが、ネックレスの魔法は水にあてない限り消えないはず。だから君が変わらないのはおかしい。」

諒「そうか…。どうしようか？」

沙「とりあえず、原因が分かるまで君はこのままで過ごさないとはいけないわ。」

諒「いや、女子校に男子生徒がいるのはさすがにマズイし！あと、秋月にバレる可能性が高い！」

沙「生徒なら大問題ね。あと、秋月さんじゃなくても他の人にバレてもマズイわ。あなたは知らないと思うけど篠崎諒はけっこう有名なよ？」

諒「はい？」

沙「私が一週間出張してる間に調べてただけど、中学の弓道の大会でけっこう成績残してきてるわよね？」

諒「まあ残してきてるけど、それが？」

沙「あなたと個人戦で何度も競射（きょうしや） 弓道の試合の1つ）になった相手いなかった？」

諒「いた。」

沙「その相手は他校からもモテてしかも、自分の学校からはファンクラブがいて毎回いろんな学校から応援が来てたわ。」

諒「何っ！？俺あいつに勝つ比率が7割だったから、もしかして恨みの対象でその名が覚えられててその女子がこの学校にほとんど来てるのか！？」

沙「…、そうじゃないわ…。」

沙紀は何故か溜め息をつきながら言った。

沙「最初は恨みの対象だったんだけど、大会の度にあなたとその人が競争になるのを見て、あなたの姿を見る度にカッコいいって気づいてそのファンクラブがほとんどあなたについたわけ。」

諒「はあ〜っ！？何だそれ！？聞いてないぞ！」

沙「ええ。今言ったもの。どうせ、あなたは鈍感だから気づかなかったんでしょ？」

諒は何も言えなかった。沙紀の言うとおり全く気づかなかった。

諒「んじゃ、何でこんなに俺を知ってる人いるんだよ！？違う県なのに！？」

沙「はあ？あなた意味が分からないわ。ここは広島よ。あなたの産まれは広島でしょ？」

諒「まさか…、俺は広島にずっといたのか？転生後も…。」

沙「うん。まさか気づかなかったの？」

諒「うわ〜ん！沙紀の馬鹿っ！早く言え！」

沙「住所ちゃんと確認しなさいよ…。」

諒「広島にいるなら尚更にマズイじゃん！バレやすいじゃん！」

沙「大丈夫、あなたには先生やつてもらうから！先生なら女子校にいてもおかしくないし！」

諒「全然大丈夫じゃねえ！モロにバレるじゃん！」

薫「そこは大丈夫。任せて。」

諒「あ、薰いたんだ。」

諒に空気扱いされ薫は校長室の隅でいじけた。

諒「すまん薫！お詫びに何でもするから許してくれ！」

薫「何でも？」

諒「何でも！」

薫「だったら許してあげる！」

薫はすぐに立ち直った。

薫「それで方法なんだけど、これを使って。」

薫は諒に小さな箱を渡す。箱をあけると赤色のコンタクトレンズが入っていた。

薫「カラコンで目の色を変えて、髪を魔法で茶色の長髪に変えれば大丈夫。髪の変色の魔法は何故か諒にかけれた。」

諒「だったら元に戻す魔法をかけた方が早くないか？」

薫「私にはまだ性転換の魔法は無理なの。」

諒「そうか…。」

沙「これで、どうにか先生の問題も大丈夫ね。だから治るまで明日から先生としてお願いね。」

こうして、諒は諒として先生をするハメになった。

第16話（後書き）

だいがキャラが出てきたので、プロフィール第6段やっていきます。

千歳沙紀

身長163センチ

体重45キログラム

年齢??歳（皆の前では24歳と言っている。見た目は薫とほぼ同じ）

スリーサイズ

83 / 50 / 83

髪色青色

髪型セミロング

その他

左手の親、人差し、中、小指に指輪をつけている。その指輪を外すとさまざまな刀に変化する。刀の名前は後日紹介。

性格

人を試したり、からかうことを楽しむ。諒に対しプチス

葵湊

身長160センチ

体重48キログラム

スリーサイズ

79 / 49 / 79

年齢18歳

髪色黒色

髪型ポニーテール

その他

左目に眼帯をつけている。理由は後日紹介。

性格

部活に一人は必ずいそうなつていきたい姉御キャラ。努力家。

柊瑞希

身長161センチ

体重41キログラム

年齢16歳

スリーサイズ

85/58/85

髪色薄い水色

その他

目の色が違う。右目は水色、左目は薄い緑色

性格

シスコン。今作品の中で上位のシスコン。弓道好き。家族想い。努力家。洞察力に長けている。

篠崎鏡花

身長154センチ

体重39キログラム

スリーサイズ

80/45/80

年齢17歳

髪色黒色

その他

左手に手袋をはめている。（強盗が入った際に切られて傷ができ、隠すため）カチューシャをつけている。

性格

諒想い。ブラコン。洞察力に長けている。甘えたがり。寂しがりや。

やぎゅうかずと
柳生和人

中学時代の弓道部の副部長。諒と一番の仲良し。

感想・アドバイスお待ちしています。批判などはやめてください。

第17話（前書き）

更新が遅くなってすみません。せっかく考えて、打った文章が保存されないまま携帯の電源が切れるということが2度も起きデータが無くなった為テンションがモグラ下がり（うなぎ上りの反対創作語）になり書く気がおきませんでした。ですが記憶を呼び起こしどうにか書き上げました。書いてる途中で今日はクリスマスなんだなと考えると虚しい気分にもなりました…。

今回はギャグを取り入れたつもりです！面白いかはさておき、一生懸命頑張ったので見てやってください！

第17話

「教室」

次の日、諒は朝に薫から魔法をかけてもらい、自分の姿を変えた。あと、名前もこのままだとマズイから神崎諒と名乗ることにした。設定は薫と従兄弟ということにした。

関「…と言っわけで副担任兼補習などを行ってもらう神崎諒先生よ。神崎先生自己紹介を。」

諒「先ほど関野先生より紹介がありましたが、改めて神崎諒です。みなさん、よろしく願います。あまり敬語は得意じゃないから皆には親しい感じで話しかけるからごめんね。それで何か質問ある人は？」

質問したい事がたくさんあるのかたくさんの人が手をあげた。

関「じゃあ春野さん。」

ち「先生は彼女いますか!？」

諒「いや、いないよ。」

クラス「やったあ!!」

諒「？」

蘭「じゃあ年上と年下、どっちが好きですか!？」

諒「恋愛に年の差なんて関係ないと思ってる。」

クラス「やった〜!!」

諒「??」

星「じゃあ先生はスタイル抜群と発展途上中の体、どっちが好きですか？」

諒「大事なのは心だと思ってる。」

クラス「やった〜!!!」

諒「???」

諒はその授業が終わるまで質問攻めにあったが、ほとんどがよく分からない質問ばかりだった。

関「はい。質問終了！　じゃあ皆は授業頑張つてね。私は神崎先生と戻るから。ちなみに神崎先生は結婚されてますか？」

諒「いや、してませんが…。」

関「ふにやあ…。」

関野はその言葉を聞いて安心したのか気絶した。

諒「ちよつ！関野先生！？」

*****　　職員室　　

関「あれ、ここは…。」

諒「起きましたか、先生。いきなり気絶してビクリしましたよ！」

関「！？何で今真上に神崎先生の頭が！？」

諒「それは今は、膝枕してるからです。」

関「○＃　＠＊！？」

関野は顔を真つ赤にして起き上がった。

諒「大丈夫ですか？」

関「私はもう大丈夫です、すみません膝枕をしてもらって…。」

諒「気にしないでください、関野先生元気出してくださいよ。」

関「ありがとうございます。あとね、職員室とか生徒がいなときは私の事を

舞先生と呼んでほしいな。他の先生もそう呼んでるから。」

諒「分かりました、舞先生。」

舞「ふにやあ…。」

舞は顔を赤くし再び倒れた。

諒「舞先生！？」

*****　　放課後の教室　　

薫は放課後、諒を呼び出した。もちろん教室には薫と諒の二人だけである。

薫「お疲れさま、諒先生！先生どうだった？」

諒は溜め息をついた。

諒「疲れた…。とにかく疲れた。関野先生がその後も気絶しまくった。」

職員室で気絶後も舞先生と呼ぶ度に気絶を繰り返し、1日に合計10回は気絶した。

薫「その…、お疲れ…。」

諒「同情どうも。そう言えば部活決めたのか？」

薫「いや、まだ決めてないけど多分剣道部入るつもりだよ。」

諒「そうか。だったら部活中は離れるな。ちよつと寂しいな。」

薫「な、何言ってるの！？いつでも会えるじゃない！そうそう、治らない間は弓道部の顧問をやってもらって沙紀姉さんが言ってたから、今からでも行ってみたら？」

薫は顔を真っ赤にしながら言った。

諒「分かった、ありがとな薫。それじゃ行ってみるよ。」

諒は弓道場へ向かった。

（弓道場）

湊「あなたが新たに顧問になる神崎先生ですか。よろしく願います。先生は弓道の経験がありますか？」

湊は諒に礼をしながら言った。

諒「一応はね。」

湊「なら、私と遠近（弓道の勝負の1つで、1つの的に複数の人数が狙う。矢を1本だけ使い、的の近さで勝敗を決める。）で勝負してもらえないだろうか？」

瑞「先輩！私もいいですか！？」

瑞希が勢いよく手を挙げた。

湊「別に構わない。すまない、蓮華。審判をやってもらえないか？」突然の指名だったが、蓮華は喜んで引き受けた。

湊「先生には最初に練習してもらおうとして、最初に私が引き、次に瑞希、最後に先生、でどうでしょうか？そう言えば先生の弓具は？」

そう言う。諒は少し待っててと言い、弓道場を出た。数分後、諒は袴に着替え、弓具を持った状態で現れた。

諒「お待たせ。」

湊「すでにお持ちでしたか。では、先生は練習しててください。まず、私から引きます。」

諒は一旦練習するために外に出た。湊は諒が出るのを見ると射場に入った。蓮華は気になる事があったので瑞希に聞いた。もちろん、射の邪魔になるので小声だが。

蓮「瑞希先輩、神崎先生どう思いますか？弓道強いと思いますか？」

瑞「見た目は優しそうで、弓道のイメージがないから、多分ギリギリ的に中るぐらいじゃないかな？それより湊先輩もう会（動作の1つ、離す寸前）だから、静かにね。」

湊は的の中心をとらえるため会を長くする。そして離す。矢に速さがあつたが若干矢が横に揺れながら飛んだため、内側から2番目の黒に中つた。（的は内側の色から白、黒、白、黒、白、黒となっている。）

湊「離れが少し悪かつたな……。」

瑞「では次は私ですね。」

瑞希は湊が狙つた的へ立つ。そして、的を狙い、離す。会が湊より短い為、安定性がなく矢は的枠に中り弾かれた。

湊「会をしつかり保たないと安定した射にならないぞ。大会やメンバー決めの時に限って会がなくなるから今後の課題だな。」

瑞「はい、すみません……。」

湊「さて、最後に神崎先生だな、『お待たせ。』練習はもう大丈夫なのですか？」

諒「大丈夫。じゃあ引かせてもらつよ。」

諒は射場に入り引く準備をする。そして的を狙う。諒の引く姿を見て3人は思った。

「綺麗……。」

諒は離れた。矢速は湊よりあり、ブレもなかった。矢は内側より1

番目の黒に中った。

湊「これは、審判しなくとも先生の勝利ですね。」

湊は悔しい顔をしながら言った。

諒「悪いけど、弓道では誰にも負けたくないから本気でいかせてもらったよ。大人げなかったかな？」

湊「いえ、先生みたいに負けたくないという心を持って当たり前だと思います。今後も弓道部の繁栄の為に協力よろしくお願いします。」

湊は改めて礼をした。

瑞「すみません、神崎先生。部活の後でお話があるんですけどいいですか？」

諒「いいよ。とりあえず、矢取り行こうか。」

***** 正門前

瑞希は部活終了後諒が来るのを待っていた。15分後諒がやってきた。

諒「お待たせ。で一体どういう用件かな？」

瑞「いきなりどうしたの？茶髪長髪ってイメチェン？篠崎諒。」

諒は一瞬驚いた顔をしたがすぐに戻った。

諒「いつから気づいてた？」

瑞「見てからすぐに気づいたわ。まあ皆の前ではさすがに言えなかったけどね。」

諒「あんた、すげえな…。」

瑞「ふふん！」

瑞希は胸を反らしながらドヤ顔で言った。

瑞「あなた、結局どうしてそんな恰好してるの？」

諒は今までに起きた事を全て瑞希に話した。

瑞「ふ〜ん…。にしても不思議よね。」

諒「何が？」

瑞「2つあるんだけど、1つは諒華にならないこと。もう1つは篠崎諒が柊諒華ってバレてはいけないのは知ってるけど、よく考えたら私あなたの正体知ってるじゃない。大丈夫なの？」

諒「それは俺も思った。話してしまったのに死なないのはなんですか？」

？「それは、瑞希先輩が諒華が元々は篠崎諒って知らなかったからよかったのよ。」

その声が聞こえた後、何故か近くにあった段ボールから薫が現れた。諒「お前！どこから現れてるんだよ！」

薫「あなたは柊諒華から篠崎諒を知ったから。『スルーかよ！』バシてマズイのは篠崎諒を元々知ってる人が柊諒華は篠崎諒だ。って事。つまり秋月さんとか中学時代の人達ね。」

諒「スルーひどくない……？」

瑞「なら、鏡花さんに会ったのはマズイのでは……？」

薫「大丈夫。鏡花さんは柊諒華を知らないから。諒は別世界にいるぐらいしか知らないから。」諒「（もうスルーにツツコのやめよう……）なるほどね……。だけどいきなり出てきて説明とは……。」

薫「読者も疑問に思っただけじゃないと思っただけから出てきたの。」

諒「何の話だ？」

薫「これなんて読む？」

薫は一枚の紙を見せた。それには立派な字で空気と書かれていた。

諒「空気を読めと、はい自重します。」

薫「そう言うこと。それじゃ私はこれにて。」

薫は再び段ボールに入り、自分の寮へ向かっていった。

諒「時々、あいつがよく分からない……。」

瑞「大丈夫、私も今分からないから……。」

二人は薫の不可思議な行動に悩まされながら、用件が終わった瑞希は帰っていった。

諒「あ、そう言えば、今日は朝早くに魔法をかけてもらって早く寮から出たから誰にもバレなかったけど、諒華の寮に俺がいるのはマ

ズイな……。どうしよう……。」

諒が悩んでいると後ろから声をかけられた。

舞「あれ？神崎先生まだ帰られてなかったんですか？」

諒「舞先生こそ、どうされたんですか？」

舞先生と言われた、舞だが流石に気絶はしなくなった。顔は赤くなつたまんまだが。

舞「ええ。ちよつと仕事が残っていたから。そうそう今日柊さん休んでたけど、結局連絡なかったからどうしたのかなあ……。」

諒「（しまった！諒華がいない理由考えてなかった！）そ、その、何でも親戚の人が諒華に会いたいつて言われたらしくて北海道に急遽向かつたつて言つてたのを神崎から聞いていて舞先生に伝えるのを忘れてました！（苦し紛れに言つたがどうだ！？）」

舞「なるほどね……。神崎先生そういうのは早く言わないと駄目じゃないですか。」

諒「（疑われなかった！？）す、すみません……。」

諒は助かつた気持ち半分とこの人天然？という気持ちが半分だった。

舞「それは終わった事にして一体どうしたんですか？悩み事ですか？」

諒「それは……。 (言えない、帰る場所がないことを！)」

舞「まさか、帰る家が急な用事で、無くなつたとか!？」

諒「!？」 (女性つて人の心を読むスキルがあるのか!?)」

舞「まさか、本当……?」

諒「まさかの本当です……。」

舞「なら、私の家に泊まりますか？私1人暮らしたし。」

諒は驚いた。まさかいきなり天からの救いが来るとは思っていなかったから。だが、それと同時に男と女が1つ屋根の下に泊まるのはマズイのでは？という考えもあった。

諒「ありがたいお誘いですが、先生にご迷惑をかけてしまいます。」

「迷惑じゃないです!」

舞「迷惑じゃないです！私1人暮らしを始めてから寂しかったんです。だから話相手が欲しかったんです！それに迷惑と言うのならその代金は料理や掃除をやってもらうという事でどうでしょう！？」
諒「（舞先生、そんなに俺の事を思ってくれてるんだ…。間違いなんて考えた俺が馬鹿だな。）分かりました、先生の好意に甘えさせてもらいます。」

諒の言葉を聞き、舞は顔はいつも通りだったが手を後ろにやった。後ろにやったその手はガッツポーズだった。

舞「それじゃ、神崎先生一緒に帰りますか。」

こうして、諒華の部屋に戻れない諒は舞の家に住むことが決定した。

第17話（後書き）

今回のネタは分かる人には分かるネタだと思います。

諒「作者の見てきたアニメやゲームが丸わかりだな…。」

作者「気にするな！」

諒「にしてもいいのか？薰あんな感じにして？」

作「反省はしている！だが後悔はしてない！」

諒「こんな感じで、作者のグダグダな文章が作られるんだな…。」

作「気にしたらいけないんだよ。そんな君にここで一句。

気にしたら

そこで終わりだ

ホトトギス

諒「ホトトギス関係ないじゃん！」

諒&作「どうもありがとうございます！」

感想・アドバイスお待ちしてます。批判などはやめてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0524x/>

セカンドトランス

2011年12月25日21時52分発行